ナチス叢書

ナチスの世界政策

小島威彦著

ARS

ナチス・ドイツの世界政策

小島威彦著

ナチス叢書

アルス
刊

責任編輯

陸軍中將　大島浩閣下・小島威彦

ナチス叢書刊行の言葉

支那事變を契機とする皇道世界維新戰の發展は、これに呼應する第二次大戰により、歐洲全土を獨伊樞軸ブロックと化し、この世界史的轉換は、まさに、英米民主主義共同戰線を結成せしめ、インド、南洋、濠洲、カナダ等全面に亙る對日封鎖陣を形成せしめんとする。ナチス・ドイツは何によつて、かくも壓倒的勝利を獲得したか。これこそヒットラー總統が、日獨伊防共樞軸による、ゲルマン圏の確立によつて實現し得たものであり、しかも今や英本國攻略により、イギリスの植民地分離は、更に新しき世界長期戰に發展せんとする。まさに新興ドイツは、我が日本の國體を研究し、日本精神を體得して、荒廢せんとする舊歐洲に、新しき世界を建設せんとする。

かくてドイツを知ることは、日本を知ることであり、また日本を知ることは、ドイツを把握することである。

本叢書は、この日本―ドイツの緊密なる世界史的關係を認識し、再强化するためにナチス・ドイツの本質を闡明せんとし、併せて、我が日本が何を爲すべきかの焦眉の問題に對する、明確なる解答を與へんとするものである。

序

今日の世界變革の戰爭は、恐らく今後數十年にも亙つて展開されるであらうが、世界史上斯の如き大なる變革の時代が常にさうであつたやうに、かゝる變革が何を意味してゐるかを最も早く明確に把へた民族のみが、その後の世界史を指導することが出來るのである。

従つて、私は此の小著の中で、特に此の世界變革の方向を、日獨伊と共に英米並にソ聯の政策をも概略しつゝ、觸れることにした。勿論、此の小著に收められた小篇の中には、私が昭和十一年より二箇年間に於て西南アジア、アフリカ、ヨーロッパを調査した直後のナチス

の動向に關するものもあり、今から見れば既に自明のことに屬するものも多々あるのであるが、その當時私が調査分析したものが、今も猶現實として動きつゝあることを想ひ、敢て此處に集錄することとした。

しかも、昭和十三年より今日までのナチスの發展史を、日本との聯關に於て把へておくことは、今日の問題を明かにする所以であると共に、日獨伊三國同盟の必然性をも明示し得ることを確信した。そして、一般にナチスに關して語られることの多き割合に、ナチスの世界政策が、世界史の發展として如何なる位置を占めんとするかに關しては、殆ど論ぜられなかつたやうに思はれるので、此の小著が、斯の如き問題に對して何等か寄與し得ることを私かに確信するものである。

特に最後の一篇は、此の秋新に加筆して、將來の方向に答へんとしたものである。諸篇に孕まれた多くの不備にも拘らず、切迫せる現代の混亂が、敢て早急に此の書をも作さしめた

のであつて、讀者の一層の批判と鞭撻を賜はらんことを切望する。

二千六百年の明治節

津輕海峽の船中にて

著者

目次

目次

ナチス・ドイツの世界政策

I 日本とナチス・ドイツ

一、ナチス

歐洲大戰後の民族自決主義によつて捲き起された民族運動は、その戰勝國としての英佛米が諸國家の勢力均等の維持と分配に應じて企圖されたものであつた。特に獨逸の資本主義的競爭を抑壓せん爲に、獨逸を圍繞する新國家を英佛の保護下に形成し、以つて英佛のヨーロッパ陣營の強化と組織を完成したのである。斯の如き新國家の形成の原理こそ、民族自決主義であつた。

このことは、啻にヨーロッパにおける獨逸的勢力の分散を來さんとするのみでなく更に當時歐洲資本主義國家の相互矛盾の爆發として起つた大戰をめぐつて、彼等西歐の近世史的地

盤たるアジアの再分配の必要に迫られてゐたからである。蓋し、大戰を契機として飛躍的進展の可能性に惠まれた日本を孤立せしめ、以つて英佛米のアジア分配の强化と維持を達成せしめん爲に、アジア諸民族の自決主義を煽動したのであつた。

かくてシリア、パレスチナ、イラク、アラビヤ、イラン、アフガニスタン、印度、支那の如き英佛米の經濟的・軍事的大寶庫を夫々斯の如き民族主義によつて分離せしめ、それらの協同戰線を分散せしめ得る如く、夫々英佛米の再分配に應ぜしめた。

此處に、支那、印度、オセアニア、アフリカ等に對する日本の進出を限界づけ、かくして大戰後再擴大された英佛の勢力分布圏を維持せんとする國際主義を捏造したのである。斯の如く大戰後主張された民族自決主義における民族概念は英佛米の世界分割に應ずる分配的支配の爲の理論的中核をなすものであつた。

然るに、其の後ファシズムやナチスによつて提唱され始めた民族主義は、上述の如き民族

概念によつて分散・縮少せしめられた政治圏の恢復と擴大に應じて案出されたのである。此の民族主義における民族概念は、生物學的種族と文化圏との政治的統一の體系より生れた。

ファシズムは英佛と爭覇しつゝある地中海圏を、嘗てのローマ文化圏として、其處に包含さるべきバルカン、小アジア、北アフリカ、イベリア半島の諸種族のイタリア的統一の下に再興せんとする。近世初期に於て、此のローマ文化圏は、中世の法王廳的繼承を通して、イタリア商業都市並にスペイン王國の發展せしむる處となつたのであるが、十六世紀の中南米スペイン植民地獲得以降、スペイン王國は恰も古代ローマの近世的形態の如く、地中海と大西洋の海上權掌握による諸種族の商業的・政治的統一を完うし得たかの觀があつた。即ちローマ文化圏がスペインによつて完全に再構成されたかに見えた此の十六世紀後半期こそ、イギリスがネーデルランド革命を支援しつゝ、スペインの海上權に致命傷を與へんとせる時であつた。

イギリスはこれに先立つてローマ法王廳よりの教會獨立を宣言し、カトリイク地盤たるローマ文化圏を其の商業資本的組織帶によつて繼承せるスペイン植民地大王國に對する「戰爭經濟」の段階に入つた。カトリイク的スペインの商業獨占に對するイギリスの自由貿易主義による鬪爭は、ネーデルランド革命に繼ぐ無敵艦隊の擊滅をもつて決定的となり、一七〇一年より四年に亙るスペイン繼承戰役によつて大なる飛躍を遂げたのであつた。

かくて、イギリスはジブラルタルを奪取するや、地中海制海權を確保し、他方ネーデルランド革命によつて獨立せるフランドルとベルギイを驅使しつゝ、スペイン植民地を略奪し、以つて大西洋海上權を併せ掌握したのである。此處に至つて、ローマ文化圏は悉く、商業資本的・カトリイク的スペインより離れて、商業資本的・プロテスタント的イギリスに移行した。

今やファシズムのローマ帝國再興運動としての民族主義は、一方に於てスエズ並に紅海の

制空權を獲得することによつて、他方ジブラルタル制空權を確保することによつて、イギリスに對する自己のローマ的世界建設を創めんとしてゐる。このことこそエチオピア並にスペイン問題におけるファシズムの世界政策のイデオロギー的根據である。併し、此のファシズム民族主義戰爭は、啻に對英戰爭を意味するのみでない。顧みるに、スペインがフランス革命軍に破れて以降、ナポレオンの征服につぐ半島戰爭を通して、アメリカ植民地の獨立運動は、一八一〇年のメキシコ獨立戰爭を火蓋として、アルゼンチン、チリ、コロンビア、ペルと燃え移り、其の間フランス共和國的精神は、その後王政復古的動搖にもかゝはらず、此の中南米における共和主義的リベラリズム地盤として、現代に於ては、人民戰線の温床として發展するに至つた。かくて今や、此の中南米のフランス戰線も亦必然的にファシズム並にフランへの協同的民族戰線との對立過程に入つたのである。從つて、斯の如き人民戰線を支援し驅使しつゝある英佛に對する民族主義戰爭は、ファシズムの生命的問題であり、英佛の

みならず米國を加ふる近世リベラリズム的人民戰線に對する全面的鬪爭に外ならぬ。

此のやうなファシズム民族主義は、ナチス・イデオロギイの中に更に明瞭に表現されてゐる。ナチスはゲルマン族の北歐神話が傳播せるヨーロッパの隅々にその復活運動を興さんとして、自己の最大の政治的文化的統一期たる神聖ローマ帝國の再建としての第三國家を意慾する。

嘗てローマがフェネキアの地中海圏を第二ポエニ戰爭を以つて制覇するに至つた燦然たる大ローマ文化圏は、クリスト教の侵入に次ぐにゲルマン侵入をもつて西はイベリア半島、東は黑海に及ぶ全ヨーロッパの變革期のうちに陷つたのであつた。此の大動亂の世界史的根據こそ實に日本の發展並に漢民族の支那制覇によつて搖り動かされた匈奴の西漸に伴ふ歐洲民族の大移動であつた。即ちアッチラ戰爭によつて搖り動かされたヴァンダルのヨーロッパ進擊に應じてゲルマン移動が始つてより、西ゴート族がイベリアを攻略するや、その國王レカ

ッドは舊教徒として西南ヨーロッパを完全に支配したのであつた。然るに、恰もローマ帝國分裂後の西南アジアの政治的空隙に乘じて擡頭せるアラビア族の擴大的勢力が法王廳的世界に對立して北アフリカを掌中に收めるに至つたサラセンと西ゴートとの結託するに及んで、イベリア半島は西ゴート王朝よりコルドワのカリフ回教徒王朝へ轉化したのであつた。斯の如きヨーロッパの大勢は、法王的世界の衰微を促進し、其の防衛戰線たる十字軍は、西にあつてはスペイン貴族のカトリイク的再統一を齎すと共に、中歐にあつては法王權の動搖を再建すべきゲルマンの神聖ローマ帝國を成立せしめたのである。

此の十世紀より二世紀間が、イベリア半島においてはボルトガル王國の創建期であり、またカスチラ國（コルドワ、セヴィラ）とアラゴン國（コルシカ、サルディニア、シシリア）との聯合としてのスペイン王國の創造期であつた。他方において、ライン、ダニューブを包攝するゲルマンの神聖ローマ帝國期であつた。今日ナチスは此のゲルマン圏を復興せしむべ

きドイツ、フランス、オーストリア、ハンガリ、アルプス、チェコ、ルーマニア、バルト諸國の統一的大版圖建設を目指すと共に、更に前述せる初期ゲルマン移動のローマ帝國圈への侵入路再建に驀進したのである。

このナチス民族運動は必然的にファシズム民族運動と激突すべき事態を、處々に孕んでゐたのであつたが、一九三七年の獨伊協定によつて明白に英佛リベラリズム人民戰線に對して協同戰を開始するに至つた。かくて、ナチスは地中海、アフリカ、スペイン、南米、西南アジアをファシズムに委託し、北・中・東・西ヨーロッパをナチス民族戰線に統合しつゝ、第二次歐洲大戰へのナチス・ファシズム共同陣營を準備し畢つたのである。即ち南方はファシズムによつて、北方はナチスによつて、相互呼應の戰線が張られたのである。

かくて、近世史はリベラリズム人民戰線の代辯者イギリスと新民族戰線の獨伊とのヨーロッパ大戰の段階に入るに至つた。

二、日本とナチス・ドイツ

ヨーロッパの問題は、しかも日本と切り離しては存在することが出來ない。嘗て、ヨーロッパの發展の爲に、その東洋市場をイギリスに代つて掩護しつゝ、寄與し來つた日本は、今や全く反對の意味に於て、ヨーロッパの再建設の爲に、貢獻するに至つた。

東洋の日本的創造は、必然的に東洋の地盤に於てその發展を約束され來つたイギリスの沒落を決定した。かくて、第一次歐洲大戰後イギリスの植民地として相互鬪爭と消耗に追ひ立てられたヨーロッパにあつても亦、此の日本的世界創造によるイギリスの凋落退潮に乘じて、ヨーロッパをイギリスより解放し再建せんとする强力なる戰ひが開始されたのである。

ナチス・ドイツを驚歎するか、然らずんば忌避するかの二途しか知らざるかに見ゆる風潮

は、獨り英佛米のみならず、日本に於ても然りであつた。その一様化的統制を好んで口にする者多く、その多角的統一を學ぶことを欲せず、いはんや、ナチス・ドイツの世界史的批判に至つては洵に寥々たるものである。

昨日にバルカンの映畫配給線の買收始りしやとみれば、今日はバルチック諸國のホテル、新聞の獲得、彼處に對佛軍事道路の建設起るとみれば、此處にウクライナ進撃の演習の音響く。親英論者の活動に耳を聳つれば、背後よりイタリア・大アフリカ主義の實現に備へんが爲の陣營論、沛然として耳を蔽ふ。右にスペイン問題に奔走すれば、左にドイツ支那市場論の烽火あがり、滿洲事變後より支那事變を通ずる數箇年を顧みよ。

ダニューブ河に、バルカンにナチス勢力の浸透をみる間に、オーストリア合邦を成す。地中海並にアフリカ問題をファショ・イタリアに代辯せしめたかと思へば、日獨伊防共協定による反英世界史陣營を構成する。南北に、ハンガリア、ポーランドの國民運動を支援すれば、

既にチエッコ・スロヴァキアを包圍する。嘗てのゲルマンの神聖ローマ帝國圏は、今や一としてナチス大藏省に直屬せる植民地委員會の關せざるはなく、ゲルマン族の住む處、一として宣傳省の諸委員會に屬せざるはない。しかもナチスの秘察警察、ゲシュタッポの活躍に裏づけられながら、ヨーロッパを席捲せんとする新民族文化國家の建設を方向づけてゆくナチスは、此の數箇年の中に、全ゲルマンが總動員されるための積極的體制を完備し、資源とカルテルと人的要素の統一的な戰爭體系を樹立したのであつた。

文化エネルギイを窒息せしむるにあらず、來らんとする時代への、エネルギイ發展の統一的主體の確立と擴充。萎縮しゆく古きものへの徹底的拋棄。新なるものへの果敢なる積極性。このゲルマン的意慾こそ、その民族文化理念の行動的體系を作り得たのである。新鮮なる芽を摘むにあらず、次の時代を荷負ふ青年に呼びかける方向と健康なる意慾。その具體的體系を樹立せるナチスは、何よりも青年に新なる國家建設の仕事場を造ることを忘れなかつた。

最も先んじて、ゲルマン族のヨーロッパ統一への意志と矜持を、少年に植ゑつけた。北海を過ぐる新装ドイツ船に溢れる青少年團は、自己の建設すべき世界を共處に映しみる。血に塗れたドイツ國土再建を遍歴せしめては、鋤を自己の生命と思はしめ、地球に點在せるゲルマン族の活動を銀幕に映しては、明日の建設に歡呼せしむ。男女を問はず、その階級を問はず、新ゲルマン青年の活潑な旅行編隊、全青年、全勞働者の國庫負擔の大旅行隊、これらすべては、旅行委員會の活動に屬する。

此の歐洲文化の擁護者ヒトラー政治は、もとソヴィエトの階級革命の陣營とジュネーヴ體制とに對して甫めて生誕したものであつたが、佛・ソ協定、佛協商國による對獨包圍陣の完成に據つて、却つてナチス勃興は自己の目的と戰鬪體系を樹立した。

かくて、ドイツの日本に對する世界政策は、その經濟的條件、東洋市場の關係のみからは直ちに親日的ではあり得なかつたに拘らず、對ソ戰術並に植民地奪還問題における對英戰術

上、日本接近の態度を持しつゝ、歐洲再建のヘゲモニイ確立の爲に孜々としてその內外の整備にとりかゝつてゐたのであつた。

併し、獨伊と日本とを結ぶ地球の共同戰線は、アジアを通ずる路のみではない。既にイタリアは地中海の制空權を掌握し、一方スペイン並に西阿における西領諸植民地の島嶼を通じて南米への飛石を敷きつゝ、他方カナダのカトリイク陣營の强化を企圖しつゝある。卽ち、南米にあつてはアルゼンチンにおけるユダヤ流入を契機として、獨伊の共同侵入を敏活ならしめ、南米のユダヤ的米・英・佛の勢力に對抗するに至つた。

これと共に、嘗てヴァチカン密約によるカトリイクのファシズム的世界網の擴大、强化は逸早くカナダにも展開された。もと獨英のプロテスタントのカナダ侵略に對して其の覇を爭つた佛・西のカトリイクは、今やそのあらゆる地盤を、ファシズム・カトリイクに糾合さるるやに見えた。しかも一九三七年より急激に增大しつゝあるナチスの諸技術の全米への侵入

は、漸くナチス的諸條件をカナダに植ゑつけ始めたのであつた。かくて、カナダにおける獨伊の共同戰は、地中海と北海における伊獨の決定的な制空權によつて、着々進展し始めたのである。

此のカナダ問題卽ちイギリス生命線の崩壞危機は益々深刻化されんとし、第二次歐洲大戰勃發せば、獨・伊はカナダ攻略を、而して日本が印度進擊を敢行するであらうことは、イギリスの最大問題と化した。このことの爲に、ヒトラーはウクライナ問題を表面化し、カナダ並にアメリカ問題のカムフラージュを企圖し、他方ムッソリーニはバルカンにおける伊・ソ關係の調整に努力しつゝ、實はカナダ進擊をもつて決定化するであらう第二次歐洲大戰への準備にとりかゝつてゐたのであつた。

かくて、印度を通ずるイギリス的近世史の瓦壞の道は、カナダを通ずる決定的壞滅の道と並んで、日本の最後の裁斷を俟つに至つた。一九三九年、海南島を據點とする日本西方進路

は、單に印度通路のみならず、カナダに向ふ東方通路にも連なる太平洋問題の中に活潑に脈打ちつゝ、日獨伊軍事同盟論が我が世界史的意慾として燃え上つた。

此のイギリス的近世史の壞滅のみ、日本世界主義文化の世界戰爭を決定する。此の世界戰爭のみ、新なる世界文化の誕生でなければならぬ。このことの爲に、獨伊の媒介的地盤を最も有機的に活用すべき、日本世界政策の樹立と具體化が大いなる警鐘を打ち鳴らしてゐたのである。この日本戰爭を阻止せんとする英・米・佛・ソの經濟的牽制の示威運動に戰慄する如き日本人は、何よりも日本の攻勢のみ、世界を左右しうることを自覺せねばならぬ。既に、日本太平洋問題との關聯なくして、現代世界史は存在し得ざるが故である。

人々は、ヨーロッパ北方に斯の如きゲルマン族の新歴史創造の誇りを、南方にローマ帝國復興の洪業をみて、或は稱讃し、或は戰慄する。併し、日本の學ぶべきものは、單にアジアの一半島に過ぎざるヨーロッパ統一へのゲルマン・神聖ローマ帝國にあらず、また地中海圏

再興へのローマ帝國にあるのではなく、世界の新秩序建設にあるのである。

ゲルマン族に作り上げたナチスの統一的矜持、ローマ族が他民族を收攬せる體系的戰術。その兩者を併せもつ日本の世界政策、即ち世界諸民族の多角的統一の主體性の樹立とその建設のみ、日本エネルギイの世界史的性格に孕まれた問題なのである。ゲルマンとラテン、ユダヤと支那の世界史的民族を如何に驅使し、如何に再建するかは、日本世界政策の將來を約束するものである。嘗てローマ共和國並に東西ローマ帝國は先進エジプト、小中アジア、ギリシアの文化圈卽ち、紀元前四世紀末のアレキサンダーの死後より、第七世紀のサラセンの勃興に至るアレキサンドリア文化圈に屬する諸民族を驅使せしにあらずや。嘗て、神聖ローマ帝國は法王權に抗して、中世紀末期卽ち十世紀より十三世紀の成吉思汗戰爭に至るヨーロッパの暗澹たる谷間に、よくゲルマンの統一と擡頭を企圖したことを、想起せねばならぬ。このヨーロッパの二大民族を使役するに足る新世界形態を創るべき誇りを、日本國民に植ゑ

る其の主體性の自覺と仕事場を構築せねばならなかつた。然るに、斯の如き日獨伊による世界革新の必然性と可能性のうちに我が國は置かれながら、此の可能性は、一九三九年の夏、考猶にもイギリスによつて、遮斷されるに至つた。

II ナチスとヨーロッパ

一、ヒトラーの對英佛政策

顧るに、ヨーロッパが第一次歐洲大戰より第二次歐洲大戰を通じて、その近世史の幕を閉ぢんとする此の大なる世界史の谷間に、恰も神聖ローマ帝國におけるオットー大帝の如く、或はプロイセンツームにおけるビスマークの如くヒトラーは立ち上つた。大戰後歐洲政治の代辯者たる地位を築き上げたフランスの全盛期、バルツウ内閣を通して、歐洲否定の陣容整備をなさんとしたソヴィエト外交を、世界の頭腦は忘れ得ないであらう。およそ世界史における一國の運命は、その時代の最大の國家を敵にもつ共の目的と體系によつて決定されたのである。嘗てのギリシヤが最大のペルシアに對した如く、ローマが最强のカルタゴに對した

如く、或はサラセンが法王廳に、トルコが東ローマ帝國に、近くはナポレオンがオーストリア帝國に對した如く。併し、ソヴィエトは斯の如き歐洲史を一貫した類型と異つた戰術を、歷史に提供した。西にあつては歐洲の覇者フランスを通して歐洲の危機を釀成し、東にあつてはアジアの王者日本を媒介としてアジア政策の確立を企てんとした。

ナチスはラインとダニューブを中軸とする廣地域國家たるゲルマンの神聖ローマ帝國復活としての第三帝國を企圖して以來、北歐より中歐、バルカンへの據點連絡に全力を擧げて來た。かくて、獨墺合邦に先立つて、ナチスはハンガリアの國民運動とルーマニアの右翼革命との工作を敢行せんとしたのであつた。即ちハンガリアに對して、歐洲大戰後チェッコに割讓せしめられたスロヴァキア奪回運動を支援することによつて、ルーマニアに對しては、黑海北岸におけるソ・ル國境のドニエーブル並にベッサラビア問題を後援することによつて、その國民運動と右翼革命を遂行せしめた。これと共にルーマニアのトランスヴァニアにおける

ゲルマン民族のナチス結成を企圖するやヒトラーはドイツ、オーストリア、ハンガリイ、ルーマニアを貫通するウクライナ進軍の準備をなし、ソ聯への牽制に成功したのである。

たとへ、ルーマニアが英・佛・ソの政治的紐帶によつて結ばれてゐようとも、ナチスの民族的、文化的工作に並ぶ獨羅經濟協定に示される如きドイツ勢力は、今やイタリア、アルバニア、ブルガリア、ユーゴスラヴィア、ハンガリア、スロヴァキアの獨伊統一戰に呼應しつつ、實質的にはウクライナ並にトルコ問題への發展的な線を畫くものであると云はねばならぬ。併し、このことはトルコ並に東地中海問題における獨伊の決定的な展開によつて甫めて具體的な形を取るに至るであらう。

しかるに、チェッコのズデーテン・ドイツ問題に呼應して表面化し始めたイタリアのコルシカ、チュニス問題によるフランスの沒落的硬化を利して、ヒトラーはすかさず獨佛協定を結んだのである。このことはナチスの對ソ聯進擊に關して後顧の憂ひを斷つ爲め、獨佛國境

の暫定的安定を企圖せるものであつた。そして同時にヒトラーはムッソリーニにコルシカ、チュニス問題支持を確約して、一時フランスの全關心を地中海問題に集中せしめんとするものである。勿論地中海問題は、當時にあつてはフランス・イタリア問題といふよりも寧ろ英伊鬪爭に外ならなかつたのである。

從つてヒトラーはムッソリーニとの協同の下に、英佛の視野を地中海に限定することによつて、實はウクライナ三千萬のうち、その一割を占めるに至つたナチス系をダニューブに沿ふドイツ統一戰線上に確立した重大問題を、稀薄化せんとしてゐるのである。このことの爲めに、實にフランスの左翼はその機關紙ユマニテを以て、右翼はエボック紙を以て、フランス政府攻擊を開始した。併しながら、是等のフランス言論機關がナチスの資金によつて動かされつゝあつた斯の如きフランスの輿論の分裂こそ、却つてナチスの世界政策の勝利を物語るものと言はねばならぬ。

此の隆々たるフランスに歐洲否定の爆彈が埋められるのをみて、英國は心祕かに北叟笑みつゝ、ナチス擡頭とその親英策を、歐洲政策に於てはフランス牽制として、東方政策に於てはソヴィエト牽制として迎へ入れたのであつた。而してイギリスは他方、ナチス・ドイツの國際經濟陣營を左右せんが爲に、ナチスをしてユダヤ放逐を敢行せしめ、以つてその經濟的脆弱化を企圖せんとする。フランスは對獨包圍線の强化を一氣呵成に成し遂げんとする。東はソヴィエト、中歐、バルカン、そして南はイタリアに向つて。かくてアフリカの利權を與へつゝ佛伊協定を結ぶのである。やがてはオーストリアにおけるナチス・ドルフスの暗殺、獨伊對立。この時、既にイギリスの歐洲諸勢力の對立、桔橰に對するオーソドックス外交の手は伸びてゐたのである。ムソリーニの對英戰鬪力を削ぐためにも、獨伊接近を豫防するためにも、ドイツ對佛・ソ關係を深化せしむるためにも、佛伊協定線を默認しつゝドルフス暗殺事件を導かねばならなかつた。

併しながら、ムソリーニは大アフリカ主義實現の旗幟の下に、地中海圏における對英戰鬪網の準備を果敢に進めて行つた。このことは同時に、直接的に獨伊關係の危機即ち中歐並にバルカンにおけるイタリアの對獨城塞の出現のみならず、ドイツの回教徒媒介による南進政策準備の崩壞を來し、他面佛伊關係の惡化、即ち對獨包圍陣におけるフランス統一の龜裂並に將來必然的に生起せざるを得ないアルゼリア、モロッコ問題の危惧となつて、此處にまた歐洲の自己矛盾の運命は深まつたのである。この獨伊佛相互尖銳化のうちに、イギリスの歐洲勢力均衡による自己世界所有形態の維持とソヴィエトの歐洲否定との觸手を忘れることは出來ない。

斯の如き不安化される對獨逸包圍陣の最中にあつて、ヒトラーは、國內の自己充實と並んで、オーストリアをはじめ中歐並にバルカン、チエッコ、ポーランド、北海に對する經濟的文化的進入の陣營整備に奏功しつゝ、對ソ・佛・伊の連絡網を內部的に斷ち切つて行つたの

である。

かくて、ヴェルサイユ條約の破棄、卽ちルール並に常備軍の問題を解決、國際聯盟脱退を敢行する。此の間、ヒトラーはローゼンベルク一統に、アリアン民族第一主義のモットー、卽ち歐洲文化擁護、ソヴィエト撲滅と共にゲルマン、アングロ・サクソンの協同による新ヨーロッパ史體系の、イデオロギイ樹立をなさしめ、暫定的に親英政策の線に沿つたのである。併しながら、是等のナチス勃興の準備期における對ソ佛戰線充實とファシズム發展期における對英戰線擴充とが、滿洲事變以降の日本大陸政策のエネルギイによつて甫めてその齒車を廻轉し得たことを想起しなければ、この數年間の歐洲政治の轉變は把へ得ないであらう。

もと歐洲大戰のどん底から立ち上つたファシズムとナチスとは、日本の大陸エネルギイに依つて、前者は反英政策を後者は親英政策を實行することが出來たのである。アジアの運命

を左右することが世界を抱きうる地理的・經濟的・文化的生命に關することを、世界史は本能的に立證してきた。この代辯者イギリスが自己の世界體系維持の爲に、歐洲列强の均衡策として、對フランス、對ソヴィエト陣營たる獨伊をあやつりつゝ、而も此の新興二大勢力を相互對立的に据ゑ置いた時、既にムソリーニとヒトラーは世界史の宿命を握れるアジア・エネルギイによつてのみ英國牽制の大道橫はれることを、知悉してゐたのである。

エチオピア問題、スペイン問題、日獨防共協定の發展。これらは一に日本アジア・エネルギイの歐洲における反映に外ならぬ。ヒトラーの親英政策破棄は、此の時より決定的な姿勢をとり始めたのである。かくて、ナチス・イデオロギイ體系の指針は、ローゼンベルグ一黨をして專ら對ソヴィエト線に集中せしめると共に、ハウスホーファー一黨をして對英・佛線の固めに沒頭せしめる。一方に於ては、自己の生命發展を決定する日本エネルギイに對して、アリアン第一主義の修正を忘れず、他方に於てはバルカン並に中歐における獨伊協定に

全勢力を向ける。リッベントロップを乘せた飛行機は東に日本、西にイギリスをにらみながら、幾度かナポレオンの峠、ブレンナーを越えた。

獨伊密約を通じて、ヒトラーはオーストリア並にルーマニア問題の解決の準備を完了すると共に、嘗てのムソリーニのバルカン問題におけるアタチュルク驅使の故智に倣つて、ルーマニア・ブルガリア對立解消にポーランドを立役者となしつゝ、自己のダンチッヒ、ポーランド・コリドール、リッアニア線の對ソヴィエト北海制覇による北進路開拓に急速をもつてとりかゝつたのである。かくして、東歐の寶庫ルーマニア、北進要路のバルチックを掌中に握りつゝ、ソヴィエトに向つてはウクライナ占據と日伊接近とのイデオロギー體制を備へ、同時にイギリスに對つては曾ての親英ノイラート〝シャハトに代置さるべき新陣容を作り上げる。アジアに於ては自己の舊植民地問題を拋擲して、イタリアの地中海並にアラビア人問題による南進策を許容し、その對佛英戰の擴大を願ふ。

然るに他方フランスの既存政治網は、國際聯盟を中心として、スペイン、オーストリア、チエッコ、ソヴィエトをつなぐ歐洲横斷の線に過ぎぬ。今や、そのスペインの一角崩れ、オーストリア危機迫る。獨墺合邦成立すれば、既にチエッコは逆に獨逸の包圍する處となり、如何にフランスがチエツコを死守せんとするも、もはや現實的には、何等の意味すらないのである。かつてナチスが傲語した「チエッコは一時間を要せずしてナチス・ゲルマンとなるべし」といふ言葉は單なる宣傳ではあり得ない。ヒトラーはこの對佛・ソの歐洲の鍵を、支那事變による英・ソ後退、イタリアのトルコ、バルカン、小アジア、北アフリカ、スペインのローマ帝國線强化の潮時に、確固として握つたのである。

これこそ日獨伊防共協定と獨墺併合とであつた。

かくてヒトラーはフランスの國際陣營ジュネーヴを蹂躙、既存の政治要塞の崩壞を遂行、それと共に、ムッソリーニのスペイン再建並にアルゼリア、モロッコ、回教徒線確立、新疆

より中小アジア、北阿に跨がる回教徒聯盟の發展を媒介として起りつゝあるソヴィエトの對トルコ問題の擡頭、レニングラード、白ロシア、ウクライナ、コーカサス、各軍團の對獨伊戰時體制の强化とフランス急進社會黨、右黨の大同團結による對獨戰鬪姿勢の硬化に對して、既に戰爭體制を布き畢つたのである。此のナチス政策の發展こそ、偏へに日本のアジア建設における對英・ソ戰線に懸つてゐたといふべきである。

二、獨　伊

歐洲近世末期の表現こそ世界大戰であつた。かくて、あらゆる戰爭が新なる形態を生產する客觀的役割は、この大戰にあつてはソ聯の近世歐洲批判者としての國家形態を新生せしめ、從つて歐洲の普遍化たる近世世界史の否定者として、東西兩洋にその思想的陣營を擴大

するに至つた。この歐洲否定の陣營は、大戰後その疲弊の極地に追ひつめられたドイツとイタリアに浸潤する。これに抗して一九一九年ミラノに結黨せるファシストはムソリーニの指導の下に、一九二二年イタリア政權を獲得するや、國家統制の獨裁政治强力化をもつて、ソヴィエトに對立する歐洲擁護の役割を擔はんとしたのである。

この歐洲擁護線上に、極度の混亂と革命を經たるドイツも亦、ヒンデンブルグ大統領の暫定的安定期における一九二九年のアメリカ恐慌と滿洲事變を契機として、ヒトラー「愛國綱領」の下に、第三帝國を登場せしむる。

このナチス民族運動は前述の如く必然的にファシズム民族運動と激突すべき事態を、處々に孕んでゐたのであつたが、一九三七年の獨伊協定によつて明白に英佛リベラリズム人民戰線に對して協同戰を開始するに至つた。

併し、この時既に日本は帝政ロシアの極東侵略を擊退し、第一次歐洲大戰を通して世界の

政治・經濟の中樞に侵入しつゝ、マルキシズムの近世史批判と日本主義の西洋批判とを媒介として、自己の諸民族統一の古典的理念を新に磨き上げ、以つて歐洲に代るべき新なる世界主體の初期擡頭期を形成したのである。此の世界變革の日本エネルギイは西歐近世の母體たる東洋の新編成によつて、近世主體の崩壞を導く。かくて、イギリス植民地帝國の動搖はファシズム・イタリアとナチス・ドイツに歐洲再編成の可能性を與へ、英國は此の獨伊に對してあらゆる妥協を提出しつゝ、自己の世界維持に狂奔し始めるのであつた。

このことこそ、イタリア並にドイツの、ソヴィエトとイギリスとによる挾殺を意味し、此處に獨伊の反ソヴィエト陣營は急速に相提携して反英陣營へ轉化せねばならなかつたのである。併し、此の必然性は新なる世界變革の世界史的必然性と離れては存在し得ず、かくて獨伊は日本のアジア的主體による世界革命の一要素として、解消し行く運命の下に橫はつてゐたのである。

此の世界革命に參加すべき光榮ある運命は、日獨伊防共協定の名に於て象徴され、歐洲變革促進の役割を遂行し行くのである。かくて、獨伊の歐洲擁護は、舊歐洲瓦解へ變轉し、新世界建設への媒介的榮譽を克ち得んとする。正しくムソリーニの標榜せる大ローマ帝國復興の洪業は、ローマのもつた運命の如く、東西交流による新世界文化の傳道者たる世界史的使命の遂行と共に、歐洲のアジア的變形を招來するであらう。

併しながら、ムソリーニの歐洲第二次世界戰爭の潮は、その絕頂に到着した時卽ちアメリカとアジアとの東西二大陸に及んだその瞬間に、分水嶺を降り始めるのである。蓋し、西にあつてはアメリカこそイギリスの延長であると共に最後の生命である。東に於ては此のアジアはイギリスの運命を決定する最大の寶庫なのである。ムソリーニが此處に戰線を擴げた時こそ、歐洲第二次世界戰爭の爆音隨所にあがりて、舊歐洲荒廢の決定的時期を造るのである。

世界史は此の如き歐洲の內的自己矛盾を荒々しいどよめきを以つて、日本の前に告訴し

てゐるのである。今や日本は、アレキサンダーの運命を、或はナポレオンの悲劇を、此のムソリーニに負はしめるべきなのであるか。

ドイツとイタリアとの日本に對する世界政策は、全く別個の戰術より出でてゐるのである。ヒトラーはその經濟的條件即ち東洋市場の關係からは、親日政策は矛盾してゐるに拘らず、對ソ戰術並に植民地奪還問題における對英戰術上、日本接近の態度を持しつゝ、實は日本の國體に對する憧憬ともいふべき天才的直觀の下に新ドイツ確立の爲に孜々として專念してゐた。併し、ヒトラーは決してビスマーク政策を變更するものでなくして、常に宣傳省たるナチス・アカデミア內に於てローゼンベルグ一黨をしてゲルマンの北ヨーロッパ圈を中心とする、統一的歷史體系の用意に專念せしめた。從つて彼の關心は獨佛戰爭にあつたのである。併し、イタリアはアジアの反擊の裡に自己の反映をみつゝ、一方に於ては東洋への新なる經濟的進出を、他方に於てはローマ・カトリイク並に回敎徒線の東洋擴大を企圖し以つて

イギリスへの反撃の强化に乘り出した。この故に、ムソリーニの親日策は絶對的に反英世界政策の線上にあつたのである。

この數年の世界史はまさに近世の崩壞と新なる世界創造の大なる谷間であつて、世紀末的な戰爭の類型と全く異つた型を示した。世界史的變革の時代にあつては、戰爭は一定の地域に限定されて敵對する二陣營が戰ふといふことはない。近世の諸關係の紐帶の凡ゆる絲が諸所に於てときほぐされるのである。この意味に於てナチスが近世的諸關係の紐帶を切斷して行く諸々の鬪爭は、直ちに日本の世界戰爭と密接な關聯を持つてゐるのである。

この日本世界戰爭に連るナチス戰線は從つて單に北方にあるのではなく、南方に存することを知らねばならぬ。蓋し近世的諸關係を發展せしめた所の地盤は、悉く南方アジアに存するからである。從つて今日の北・西歐における諸問題は、ナチス南進路の徹底的進軍のための豫備工作に外ならない。最近に至るまでのトルコの英佛接近はむしろ英佛に對する探知政

策であり、ナチスの媒介的諜報企圖に外ならない。見よ！　ナチスがルーマニアを確保するや、ルーマニア・トルコ協定の成立を見た。このヨーロッパとアジアを結ぶ傳統的なる世界史の通路——バルカンとトルコのナチス的統一ルートの開拓は何を意味するか。

一九三九年、シャハトのイラン、アフガニスタン、印度に於ける經濟的進出の諸工作は、既にかくの如きバルカン・トルコ統一戰線の進軍路を、印度ルートに連結擴大せんがためであつた。世に喧傳されてゐるウクライナ問題はナチスの反英政策をカムフラージュするものであつて、西南アジアに於けるナチスの印度ルートが確立するや、ウクライナはナチスの包圍する所となる。この事はソヴィエトの內部的分裂を必然化するのであつて、從つてナチスは決してウクライナ・ルートをとるものではない。西南アジアに於ける印度ルートは古代よりの東洋と西洋との最大の通路であるのみならず、今日に於ても亦凡ゆる近世的諸關係の連結路たるを失はぬのであつて、ナチス戰線も亦こゝにのみ存するのである。

ファシズムも亦一路この印度ルートを驀進してゐる事を知らねばならぬ。嘗てローマは自己の地盤と通路と建國の基礎をこの西南アジアに求めたのであつて、ムソリーニの大ローマ帝國主義こそは、一日と雖もこの印度ルートを忘却した事はなかつた。エチオピア—紅海—イエーメン—サウディアラビアの連絡路開拓を回教徒政策と併行せしめつゝ爲し遂げ、今やナチスのビザンチューム・ルートとローマ帝國・ルートとの統一はイランに於て完成されんとしてゐる。此處に云ふトルコのビザンチューム・ルートこそはヒトラーの主張せる神聖ローマ帝國の途であつた。

この神聖ローマ帝國運動とファシズムのローマ帝國運動との統一こそ新なるヨーロッパ史を形成しつゝ、沒落し行く近世ヨーロッパの代辯者たるイギリスに肉迫した。

この反イギリスの大道、イタリア線の擴大が決定的なヨーロッパ爆發に導かれる時を、ヒトラーとスターリンとは待ち構へてゐた。その決定的危機の直前にヒトラーはスターリン牽

制を徹底的に遂行せなければならぬ。このことに依つてのみ、ヒトラーは歐洲再建の覇權を握り得るのであるから、そしてヒトラーのオーストリア並にポーランド、チェッコ並にルーマニア確保によるゲルマン線の强化に對して、ムソリーニはイタリア・フランス接近によるラテン線の强力な陣營を構築して置かなければならない。此のヒトラーとムソリーニの苦惱こそ、アジアを再建すべき日本にとつて最も重要な契機となるかに見えた。併し旣に、兩者の反英・佛・ソ政策は決定してゐたのである。

世界の計量器の西側に置かれた狹隘な一半島が、かつて東側にある大陸を見事に持ち上げた奇怪なる歷史的運命は、今やその正當なるバランスに逆轉せんとしてゐる。世界史の秤は愼重にして大膽な擧措を要求してゐる。ムソリーニの南米とアジアとにさし延べた手を、地球の中點で毅然として握りしめつゝ、やをら共の秤を大地におかねばならぬ。ムソリーニのイギリスに代はる第二次世界獲得戰は、實は世界史大轉換の前奏曲であると共に、洵に華々

しい大フィナーレの運命を孕んでゐるのである。此の反英戰争の世界史的通路を新なる世界統一への道として繼承發展することこそ、日本のイタリアに對する役割でなければならぬ。

ムソリーニをして、將來世界への大ナポレオンたらしめよ。ローマ帝國再建の洪業をして正にかのローマ帝國に對するアレキサンダー遠征路の位置を、再び新世界統一に對して持たしめよ。蓋し歐洲の内的自己矛盾は新歐洲再建をして、所詮はヨーロッパ的苦惱の必然性を逃らしめるからである。ヨーロッパはアジアなくしては存在し得ないのであつて、日本は今こそアジア・太平洋圏復興のプロトコールを作製すべきである。

ローマ帝國復活による歐洲再建の此の自己矛盾。英佛露獨伊の相互葛藤の必然性は、諸段階をとりつゝ、遂に今日、英佛露對獨伊の現狀のまゝ第二歐洲大戰に誘ひ込まんとする運命から逃れることは出來ないのである。かくの如き運命の遂行者、大ムソリーニを驅使することこそ日本の大藝術に外ならぬ。ローマ帝國再建の媒介によつて、世界統一への新道が打ち

開かれんとしてゐる。世界政治は男性の藝術であると叫んだムソリーニは、今や世界統一國家建設は歴史の藝術であるといふ言葉にとつて代はられねばならぬ。このことのみ、眞に新なる世界文化創造を現實的に約束する唯一の道なのである。

然るに、更にムソリーニはヒトラーのプロイセンツームを媒介とせる「神聖ローマ帝國主義」を絶對的に支持し、以つてヨーロッパの自己矛盾をゲルマン統一國家運動に荷負はしめつゝ、自己のアフリカ並にアジアへの「ローマ帝國主義」運動の强化に乘り出した。今や英佛ソ對獨伊の危機線が、ヨーロッパの崩壞と共に新なる世界史建設に繫がるべき世界戰爭の決定點に到着せんとする。

嘗てソヴィエト地區の擴大・發展の暴風雨は、却つて獨伊の新興勢力とその歴史觀を確立したのみではなく、日本の英・ソによるアジア植民地化に對する使命と共に、對英ソ同時作戰を導くべき日本世界史觀の再確立をなさしめた。此の日本のアジア救出におけるソヴィエ

ト的契機こそ、實にマルクスが分析することを欲しなかつたアジア民族の搾取の問題、この最大の非合理性に對する批判的精神を培ひつゝ、アジア民族と歐洲プロレタリアートとの二重のヨーロッパ的非合理性を克服すべき日本史觀のうちに解消されたのである。

此のヨーロッパ的二重搾取に對する日本の同時解決は、必然的に日本のアジア・太平洋圈の統一的文化再建に連なるのであり、このことは同時にまたヨーロッパ的プロレタリアートを主體とするコミンテルンの現實的エネルギーたるソヴィエト・ロシアのアジア侵略に對する鬪爭とアジアを非合理的に所有せるイギリスに對する鬪爭とを以つて始まる世界戰爭を必然化したのである。

このことは、獨伊の反英・反共政策の協同陣營を決定し强化し、以つてイギリスを主體とする近世自由主義國家の植民地となれる中歐並に東歐に對する獨伊の救出鬪爭を發展せしむるに至つた。このヨーロッパ文化再建としての獨伊の世界戰爭は、今やドイツ、オーストリ

ア、ハンガリア、イタリアの縦斷樞軸に依つて、南にあつては地中海、西にあつてはイベリア半島、北にあつてはダンチッヒ、ポーランド・コリドール、メーメルのバルチック海を越えてスカンヂナビア、東にあつてはチェッコ・スロヴァキア、ルーマニア戰線とユーゴー・スラヴィア、アルバニア、ブルガリア、トルコ、アラビアの印度戰線へむかつて、放射狀態の陣形をとりつゝあつた。

ミュンヘン會談の直前、ドイツがオランダ獲得とロンドン空爆の即決作戰の秘密戰略を故意に英佛に宣傳せる威嚇的戰術は、單にミュンヘン會談を急速に成功せしめたのみではなく、その現實的勢力の放射戰略の發展を物語つてゐるのである。併し、更に重要な戰線は、獨伊の東部戰線に連なる日本のアジア的放射線の充實に懸つてゐる。

一九三七年、既にダンチッヒは完全なナチス化を完了し、ポーランド廻廊の實質的解決を見てゐた三九年、ポーランドの英・ソ接近は却つてドイツのポーランドに對する現實的發展

を促進せしむるものであり、このことの爲めに英・米・佛・ソをしてポーランドを支持せしめたるヒトラー世界政策は洵に驚歎に値する巧妙さを示すものである。

このことの解決は、直ちに獨伊の北歐並にバルカンへの戰線擴大の發展となるであらう。今や北歐より英本土への戰線は、ムソリーニの北阿より西南アジアへの戰線と對應しつゝ、ドイツのルーマニア、トルコ、イランに對する經濟的文化的進出の段階に立ち到つた。ナチスは、シャハトの西南アジア經濟政策をウクライナ戰線に並行せしめ、以つてその商品・技術・通信の輸出網を擴充することに成功しつゝあつた。

かくて、獨伊のアフリカ、西南アジア、ウクライナに對する戰線は、專らイギリスの心臟、印度突擊に於て、日本の世界戰線と相見えんとする。もはや避け難き第二次ヨーロッパ大戰は、獨伊のイギリスの頭腦、ロンドン空爆とその心臟、印度突擊とを以つて頂點に達するであらう。併し、このことはヨーロッパの完き廢墟化に外ならず、第二次ヨーロッパ大戰

は獨伊のヨーロッパ再建としての世界戰爭のタイプを徹底的に遂行するであらう。

即ち既に、斯の如き第二次歐洲大戰は三七年の防共協定より開始されてゐるのであつて、エチオピア戰爭以後スペイン、オーストリア、チェッコ、スロヴァキア、メーメル、ハンガリア、アルバニア、ダンチッヒと戰線の擴大を來しつゝ、今やポーランド戰爭、スカンヂナビア戰爭、オランダ戰爭、ルーマニア戰爭、トルコ戰爭、チュニジア戰爭、エジプト戰爭、紅海戰爭の如き獨伊の分散的世界戰爭の形を以て進展せんとしてゐる。而して正しくヒトラーの念願せるゲルマン的歐洲統一の聖業は、神聖ローマ帝國の運命の如く、新なる歐洲の諸民族國家形成を媒介しつゝ、歐洲の苦惱を背負ふゲルマンの悲劇的光榮を追想するであらう。

併し、このヨーロッパ再建戰爭は、一度英・ソの致命戰たるウクライナ・印度戰線へ進展するや、日本のアジア再建としての世界戰爭のタイプの中に融合し、かくて日本世界創造の大なる戰ひの決定的段階に入るのである。

従つて、獨伊の世界戰爭は日本の反英・反共戰爭の强化によつて、その實りを擧げつゝ、近世史の二重の非合理性を克服すべき日本世界主義戰爭の光榮なる參與者となることが出來るのである。かくて、獨伊は自己のヨーロッパ文化圈をその正當なる位置に据ゑおくべき世界史的使命を自覺すべきである。

此の新世界史に對して、最も個性的な自己表現をこそ、日本は敢行せねばならぬ。このイタリアに向つて、今こそ日本は徹底的に東洋文化賦與のあらゆる援助を成すべきであり、このドイツに向つては惜しみなく、歐洲危機激化による新歐洲建設の媒介的任務を後援すべきである。この二つは日獨伊の反英共同戰線上における日本の重要な役割でなければならぬ。此處に、諸民族にその處を得せしむべき日本の古典的性格の宿命的躍動が存し得るのである。この實行の具體的體系を樹立せずして、徒に世界的日本といふ如き言葉を語ることを止めよ。

III

ナチス・ドイツの世界史的批判

一、ナチス・ドイツとソ聯

アジア大陸の西端に、再び第二次世界獲得の網を張りめぐらす新國家の出現。嘗て西歐の一海賊は成吉思汗の陸道に代ふるに海道を以つて大地を所有した。その大地を歴するアングロ・サクソン族の齒車の下に死に瀕しつゝある諸々の民族をそゝのかし、秘に策を弄せんとしたものがあつた。併し、このソヴィエト・ロシアは西歐の世界所有形態を批判し否定せんことを試みたが、猶かのイギリス海道を遮斷する道を知らなかつた。この西洋文明の否定者ソヴィエトを媒介として、歐洲再建を試んとするものを、日本は過去數年凝視してきた。

彼方大陸の西端、二個の國家が、北にドイツ、南にイタリアが新に再建の道をきり拓かん

としてゐる。恰もビスマークとナポレオンの如く。併し日本にとつては、この歐洲再建を通してイギリス世界所有の大動脈を繼承せんとする兩者を、默視する時は旣に過ぎ去つた。

海道を持たざるドイツは、ゲルマン民族國家建設の自己充實と、歐洲の危機線構成とによつてイギリス牽制をなし、その後繼者たる陣營を敷きつゝある。併し、イタリアはローマ帝國復興と大アフリカ主義を翳して、先づ地中海並に紅海の制覇を企て、イギリス大動脈の一に嚙みつかんとしてゐる。

ソヴィエトの佛・ソ協定による歐洲危機製作はヒトラーの歐洲擁護イデオロギーと北進政策の確立發展をもたらし、逆にソヴィエト自らに對してヒトラーの反擊的擴充を促進せしめた。

同時にムソリーニの對英南進政策の徹底的遂行と相俟つて、曾て歐洲諸勢力の均衡に對する國際陰謀の權化たる英國をして周章せしめ、對佛・ソ、對伊獨懷柔に狂奔せしめる。併し

ヒトラーは既にアングロ・サクソンが歐洲文化の敵であること、恰もソヴィエトと軌を同じうせるを曝露し、以つて歐洲よりソヴィエトと共にイギリスを放逐し、眞の歐洲再建を企圖しつゝある。從つて先年の英伊會商の如きも、決してムソリーニの懷柔にあらずして、完全なるイギリスの歐洲後退であつた。英國に殘された道は、佛・ソの對獨伊線とイギリス延長たる米國のアメリカ第一主義とを使嗾する外ないのである。しかも、斯の如き歐洲危機は必然的に日本アジア・エネルギイの勃興であり、そのことは同時に日本世界主義の確立とその普遍化に外ならぬ。從つて、ヒトラーの歐洲再建の企圖は、實に日本のアジア・太平洋圏における對英米ソ戰の實現を意味する。

かくて、ヒトラーの國際政治に及ぼせる影響こそは、反ソ英的歐洲文化擁護とそのゲルマン的復興、彼自らの言葉をもつてすれば、ゲルマンの血をもつて獲たる地を鍬によつて打ち建てんとする歐洲再建の悲壯なる熱情を、ゲルマンの鍬によつて耕された内部充實の全面に、

再び血を注がんとする歐洲動脈切斷の悲劇に畢らしむる、其の自己矛盾の解決に外ならないのである。

二、世界史に於ける日本とドイツ

日本の對ソ・英エネルギイに依つて、今日迄辛うじてヒトラーの意慾する歐洲文化擁護は繼續され得たのであつて、ソヴィエトの佛・ソ協定による歐洲否定に對するヒトラーの歐洲擁護に加ふるに、更に日本の積極的對ソ・英・佛牽制の世界體系樹立こそ、「日本アジア」のみならず「日本ヨーロッパ」の可能性を約束するものである。それのみ獨・ソ戰爭を現實化せしむるものであり、それのみ伊・英鬪爭を激化せしむるものである。此處にのみヒトラーの世界史的役割は宿命づけられてゐたのである。

このことは恰も、嘗てのヨーロッパ中世が、その法王的普遍形態より近世初期の領主的民族國家へ移行せんとする過渡期を、オットー大帝が神聖ローマ帝國樹立をもつて先驅したゲルマンの運命を、彷彿せしむる。オットーのイデオロギイはその後アルベルツスによつて表現された如きヨーロッパ中世の再構成にあつた。即ち、法王權によるヨーロッパ世界支配を國王權をもつて繼承し、中世的形態の發展と强化を企圖するものであつた。にも拘らず、そのことは中世ヨーロッパの諸侯的エネルギイの獨立的擡頭を促し、共處に數世紀間自己をヨーロッパに普遍化した法王的世界に對する、新なる鬪爭の段階を形作り、逆に近世ヨーロッパの萠芽期を先行するのであつた。そして最も重要なことは、この近世ヨーロッパの萠芽期におけるゲルマン先行をして斯の如き過渡期的役割を遂行せしめた所以こそ、世界史南方通路がサラセンによつて遮斷され、法王權の世界史的地盤の崩壞を餘儀なくせしめたことに存するといふことである。

この法王權の地盤喪失によるヨーロッパの空隙に、オットー大帝は誕生した。そして其の神聖ローマ帝國は十三世紀の成吉思汗戰爭によつて、卽ち世界史北方通路の東洋的爆撃によつて、自己の過渡的役割を畢りつゝ、近世初期ヨーロッパの萠芽期を媒介したのであつた。

斯の如きオットー的宿命が今やまたヒトラーの裡に宿つたのである。彼は正しく、近世ヨーロッパの支配的形態がマルキシズムによつて動搖しつゝ、遂にファシズムの古代ローマ帝國圈と日本帝國圈とによつて南世界史通路に大きな龜裂を生じた、その中に呱々の聲をあげ、ヨーロッパ近世の否定とその再構成の使命をゲルマン帝國をもつて敢行せんとする。

洵に、そのヨーロッパ統一の意圖と計畫に至つては、驚くべく革命的である。

既にヒトラーは、オーストリアを合邦し、北にはポーランド並にバルト海權を、南にはハンガリア並にルーマニアの大半をその勢力下におき、チエッコは全くナチスの捕虜となる。

しかも今やノールウェイより蘭・白・佛・英作戰を遂行すべき段階に立ち到つた。

神聖ローマ帝國を樹立したゲルマン圏はかくて、ナチス・ゲルマン帝國への段階に入らんとする。併し、神聖ローマ帝國の大空位時代に匹敵すべきナチス・ゲルマン帝國への大空隙が、ヨーロッパの自己矛盾による相互鬪爭のうちに生起すべき必然性を、誰が否定し得るであらうか。

このことは日本のアジア圈の再建と統一を通して後退しゆくソヴィエト・スラヴ帝國の西漸によつて、卽ち北世界史通路のヨーロッパへの急勾配によつて、決定線に到着するであらう。

併し問題はかゝるゲルマン帝國をして、よく神聖ローマ帝國が法王權に對抗し得た如く、正に近世の法王權たるイギリス植民地帝國を打倒せしめ、將來ヨーロッパ史への萠芽期を魁けすべき世界史的役割を遂行せしめねばならぬ必然性に存するのである。

まことに、ヒトラーは斯の如き近世史より將來史への變革を媒介するヨーロッパ的エネル

ギイを代辯する榮譽を擔ふものであり、このことを可能ならしむるものこそ、また實に日本のアジア的エネルギイの方向如何に懸つてゐるのである。此處に、日獨伊同盟の必然性が孕まれてゐたのである。

嘗ての近世史的世界分割・掠奪戰爭の時代は畢つて、今や世界解放・統一戰爭が開始されつゝある。かくて、世界は英・佛・ソ・米の搾取的・非合理的・掠奪的・平和攪亂的・文化破壞的陣營と日・獨・伊・滿・西の克服的・解放的・文化再建・創造的・統一的陣營との對立激化を明かにした。嘗てアジア文化圈のみならず、全地球の民族と文化を破壞し平和を攪亂したる共の歐米的近世文化形態を永遠化せんが爲に、唯憎惡と悲慘と惡辣、あらゆる惡德にのみ値する思想戰をもつて、英・佛・ソ・米が狂奔し始めたことは、斯の如き惡德の自己表白に外ならぬ。

世界史の批判と建設は、常に世界の最高峯に立たねばならぬ。ヨーロッパに於ても自己を

照すべき勇氣ある魂はアジアの高峰に登らんことを欲した。唯、彼等には不可能であつただけである。唯、彼等は實に此の大なるアジアを統一すべき内的必然性をもたず、またその主體的エネルギイと理念をもち得なかつたに過ぎぬ。アジアの最も高き峻嶺、日本に攀ぢ登るべき術を知らなかつた。是等多くの憐むべき亡靈のために、日本は今や毅然として、最も壯大なる物語をなさねばならぬ。

今やアジアの反擊のうちに、近世史的矛盾の解體と日本の世界建設が始つた。その理念と技術と組織の統一的實踐を、世界史の辯證法的鬪爭を通して展開すべき時が來たのである。

此の日本史の世界史的自覺こそ、何物にも慴伏されざる最も單純なる世界政策を、最も多角的に實踐しうることを知るべきである。

IV 日・獨・伊・アメリカ

一、第一期世界變革戰爭

歐米が遙か大陸と大洋の彼方に聳ゆる高嶺の如くみえた時代は遠い昔の物語となつた。山を攀ぢ岸を嚙みつゝ侵略戰の軍を押進めた歐米がアジア・太平洋の根軸たる日本に辿りついた時には既に世界は侵略的・資本主義的紐帶をもつて連結され、歐米諸國家は競うて此の紐帶によつて世界を一つにおびき寄せんことに、あらゆる惡徳の夢を描いた。至るところに、近代の理想は惡の華と化した。

人々はこの惡の華に文化の爛熟をみつゝ、猶一個の習慣的なまことに宿命的な意慾をもち續けた。彼等は、映畫と飛行機と世界革命の新たなる世界史的洪水の中で、猶も近代的泥濘

の泡くを喰ひながら、小說と蒸汽機關と植民地略奪の他何ものをも思考し得ざる憐むべき蛆の溺死體のやうに漂うてゐる。

ヨーロッパに於ても、蛆は映畫館で腰をかける禮儀を知つてゐる。併しそれは文學の延長に過ぎない。それのみではない――飛行機を作る術も心得てゐる。併し、それは人間の生活の延長であり、蒸汽機關を作つて生計を營んだ人間が、そのまゝ其處で反芻されてゐるに過ぎぬ。新なる世界を創る技術、大なる意慾の頭腦は、唯食婪あくなき蛆の胃袋に化した。

此の胃袋の巨大發達こそ、アメリカ合衆國である。如何なる蛆でも、近世的ヨーロッパを延長したら、これ以上の胃擴張は想像出來ないまでの發達を遂げた。西歐的近世が西歷十五世紀末、日本的アジア・太平洋圈の中に侵入し來つた時には、アメリカ原住民たる蒙古人種ホモ・アメリカーヌスは蛆退治の方法を知らなかつた。彼等はかくも不潔なアメリカを想像出來なかつたのである。

アジアとアメリカとの交流點は、古くより北はアリューシャン列島を通じて、太平洋は黒潮文化圏を通じて殷賑な脈を搏つてゐた。メキシコのマヤ文化やペルウのインカ帝國が、かかる脈搏の中に生長してゐたのであつた。是等の日本を媒介とするアジア人のアメリカは、西歴一四九二年の東海岸バハム、西印度諸島、トリンダッド侵略に次ぐアメリゴーのヴェネズエラ攻略やカブラルのブラジル奪取に據るポルトガル、スペインの南米植民地獲得よりエリザベス女王のカナダ攻略に至る一世紀間こそ、望郷の叫びを嘆きながら悲惨なる死を眼前にみた。此の叫喚を耳にした日本は、アジア大陸にあつてはウラル・アルタイ族の躍動と共にアメリカ大陸の悲惨に迫られつゝ、自己の太平洋を庭とするアジア・アメリカの統一的復興を敢行すべき國内エネルギイの再組織に着手した。

斯の如き再組織としての我が戰國時代は、國内統一を畢へるや、北は朝鮮を通ずるウラル・アルタイ圏と並んで、南は南洋、印度の黒潮文化圏の復古的統一を實行し、以てアジア・ア

メリカに東西より襲ひ來れるヨーロッパの進軍を迎撃せんとする。併し既にイギリスは、一方ではウォルター・ローレイのヴァージニア州植民地獲得に、他方ではフランシス・ドレークの世界周航に成功しつゝ、スペイン無敵艦隊撃滅によつて、一擧にカナダと印度への激烈なる攻略軍を繰り出した。

宗教戰爭と共に激化せるポルトガル、スペイン、フランス、イギリス、オランダのアジア・アメリカ爭奪戰としての第一期世界變革戰爭に於て、日本がそのアジア・太平洋圏の復古統一戰爭を中絕し、中立の止むなきに至らしめられたる、洵に中世變革の世界戰爭をヨーロッパに委せる遺恨事といはざるを得ない。

かくて、原住アメリカ人たる蒙古族は鏖殺に次ぐに虐殺され、アメリカは完全にヨーロッパの奴隷と化した。十七世紀初頭におけるロンドン會社のジェームス・タウン建設、プリマス會社のニューイングランドの建設、マサチュセッツ會社のボストン市建設等よりニュー・

イングランド聯合植民地同盟、新ネーデルランド奪取即ちニューヨーク建設に至る半世紀間に於て、大西洋岸のヨーロッパ植民地は略ヨーロッパ自體における諸勢力の關係を反映するに至つた。このことはアジアにおいてもまた同樣であるが、今は單に北アメリカ侵略史を概說しながら、第一期世界變革戰爭と現代の第二期世界變革戰爭との歷史的性格を語ることに止めよう。

太平洋を媒介とするアジア・アメリカの統一的文化圈に對するヨーロッパ侵入は、その統一的勢力の分散と崩壞に依つて、ヨーロッパ近世史の世界普遍化を可能ならしめた。併し、このことはヨーロッパ近世史の瓦解の爲めの二個の要因を同時に準備したのである。その一は、ヨーロッパ自體における資本主義的競爭とその矛盾であり、第二はかゝるヨーロッパ近世を培つた植民地の獨立運動である。此の近世史瓦解の二大要因を契機として擡頭する世界變革の主體は必然的に分散せしめられたるアジア・アメリカの復古的統一を實現化すべき第

二期世界變革戰爭を要求する。

しかも、所謂文藝復興より宗教戰爭、産業革命に至る三百年の第一期世界戰爭を、その後の植民地分割戰爭が第一次歐洲大戰に至るまで絶え間なく繼續したにも拘らず、特に植民地略奪戰爭と稱すべき所以は、近世史構成の根源を明かにせんが爲であると共に、その略奪のルートこそ、正しく現代の獨伊の第二次歐洲大戰を日本の第二期世界戰爭に結合せしむべき大動脈たるを明かにせんが爲である。

從つて、ジパング・日本の絹と黃金を略奪せんとして開始されたヨーロッパ近世史の爭覇が東西より相呼應するアメリカと印度への通路獲得となつた共のルートこそ、今日アメリカと印度とに對する日獨伊協同戰線に外ならぬ。此の協同戰線によつて、近世ヨーロッパの崩壞とアジア的諸民族の復古的統一が可能なのであつて、かくて新なる世界史は嘗ての植民地略奪・分割戰爭に對して、植民地解放・統一戰爭をもつて始まるのである。

然るに、此の第二期世界戰爭の段階に於て、近世的蛆が如何にアメリカを構成し、如何にその胃擴張がアメリカを蒼白化せるかを、今更諸君に傳へねばならぬほど、諸君の頭腦も亦蛆的胃袋と化して了つたのであらうか。——もしアメリカが英佛側に參戰したら日本が滅亡するであらうから、日獨伊軍事同盟は止めて、アメリカの機嫌取りを工夫する淺ましく貪慾な日本人はもはやをるまいが、四疊半から空しくニューヨークの摩天樓を仰ぐ小說的人物の爲に、しばらくアメリカ小說を試みよう。

二、近世アメリカ

植民地掠奪戰爭におけるヨーロッパの諸勢力の爭覇は、數度に亙る激突を生じつゝも、その商業資本時代を越えてイギリス産業革命を中軸として、資源と市場の分割戰線の擴大期に

遭遇した。この過度期はヨーロッパ全土を七年戰爭の慘憺たる渦中に陷れた。其の疲弊混亂期に乘じて、フランスはイギリスとの長き植民地戰線の拮抗に打ち勝つべき機會を把へたのである。

イギリスが自己の經濟的困憊を回復すべき航海條例の復活に續く印紙條例の賦課によつてアメリカ植民地の反撃に遭ふや、フランスは東部十三州植民地を支持しつゝ、西歷一七七四年、植民地對イギリス本國との國交斷絕を宣言せしめ、遂に一七七六年のワシントンの「獨立宣言」によるアメリカ獨立戰爭へ發展せしめた。かくて、ヴェルサイユ和議をもつて、アメリカ聯邦組織の共和政體と各州の自治制を布くに至つた。

併し、この獨立戰爭はイギリス人のカナダ移動を激增し、却つてカナダ植民地における英・佛勢力の逆轉の契機を作つたのである。かゝるカナダにおけるイギリス勢力の增大は、英佛の對立を益〻激成し、遂に一七九一年の上カナダ（オンタリオ）と下カナダ（ケベック）

等を分裂せしむると共に、印度を中心とする英・佛對立のアジア戰線をも亦激化せしむるに至つた。然るに、イギリスはこの植民地戰線の擴大によるフランス・ブルジョアジイの勃興とフランス舊形態との矛盾を利して、フランス大革命への道を用意し、以つて植民地戰線におけるフランス勢力を一擧に壞滅に導かんとする。

かくして、イギリスは一方に於てはフランス革命のイデオロギイをフランス急進インテリゲンチャに注入しつゝ、他方に於ては密かにカナダ並に印度戰線の擴充に全力を傾倒したのである。此のフランス大革命の混亂はアメリカにおけるフランス勢力の後退を餘儀なくし、佛・西カトリイク統一戰線を分散せしめ、中・南米におけるスペイン・ポルトガル植民地の獨立と共に、アメリカ合衆國の領土的發展を齎すに至つた。この間、イギリスは上下カナダの統一への地盤を確保し、アジア通路を殆ど自己の内に握り得たのである。

この十九世紀前半が、アメリカ合衆國の擴大期であつて、中米における佛・西植民地買收

に成功し、ルイジアナ、フロリダを加へ、更にナポレオン戰爭の逆襲を喰つたイギリスの弱點を衝いてカナダ進入を企圖する。この英米開戰はカナダに關する限りアメリカの失敗に歸したとはいへ南部三州のテキサス、ニュー・メキシコ、カリフォルニアを英・墨より割讓せしむる機縁を作り得たのである。

併しながら、此のアメリカ合衆國の擴大はその南北諸州の經濟的機構の對立を解消すべき南北戰爭を必然化した。北部の奴隷廢止派りパブリカンと南部の奴隷制を地盤とするデモクラットの對立は遂に一八六〇年の南北戰爭へ發展し、この機に乘ぜるイギリスは、「英領北アメリカ條令」をもつて上下カナダの合同を企圖し、イギリス皇帝任命の總督下にカナダ自治領を構成するに至つた。

かくて、アメリカ合衆國は、カナダに對する領土的野心を拋棄し、ユダヤ資本を媒介とする英米協同戰線を密かに張りめぐらして、外に對しては一八二三年のモンロー教書を振り翳

しつゝ、日本太平洋圏への帝國主義侵略へ進軍し始めたのである。恰も日本は自己のアジア太平洋圏における歐米帝國主義進軍の充滿の眞直中に立つて、彼等の植民地掠奪よりアジア民族を救出すべき必然性の自覺と共に、明治維新を敢行し、歐米的侵略戰線に對する防衛の準備段階に入つた。

このことこそ、アメリカをして北はアラスカ・アリューシャン通路の獲得と南洋通路奪取に全力を擧げしむるに至つた。即ち先づ、ロシアの極東政策と連結すべく、一八六七年アラスカをロシアより買收し、北方日本への壓迫を試み、ロシア極東政策を牽制し一擧に太平洋・アジアに對する英・米協同作戰の遂行へ發展したのである。此の暴戾なるマッキンレー並にルーズヴェルトの帝國主義的發展策は、日露戰爭を展開せしめつゝ、ロシア極東政策の後退と日本の消耗に乘ずる絕好の機會を作り得た。一八九七年より一九〇八年に至るマッキンレー・ルーズヴェルト侵略戰線はかくてサモア島、ハワイ群島、ポルト・リコ島、フィリッピ

ン群島、グァム島の獲得をもつて、太平洋戰略を充實し、同時に大西洋戰線と連絡すべく、キューバ島、セント・トーマス島、サンタ・クルース島を買收し、ニカラグア運河開鑿に續いて、海軍大擴張、パナマ運河開鑿へ躍進する。

かくして、アメリカ帝國主義は支那進出の諸地盤を構築し、此處にヨーロッパの再生產的アメリカと日本との太平洋上の直接的對立が二十世紀の特徴を形造るに至つた。これと共に、ヨーロッパにおける新興帝國ドイツの躍進は、アフリカ大陸分割戰の成功を收めつゝ、フランス革命を契機として獨立せる南米諸植民地をはじめ、佛・英・米に完全にとつて代はられたスペイン、ポルトガル植民地のみならず、佛・英・米の經濟的諸地盤に肉迫し、近世ヨーロッパの諸矛盾は最後の激烈な爆發點へ到達した。

この第一次歐洲大戰において、アメリカはその產業の驚異的發展を通して、アメリカニズムの決定的勝利を自覺するや、自ら參戰して世界最大の債權國家として登場した。かくて、

世界金融經濟の中樞となり、ヨーロッパの再生產的繁榮をむさぼるに至つた。此のアメリカの資本主義的上昇期たるモンロー主義よりウイルソンに至る一世紀間こそ、その上昇期的利害の一致によつてよく輿論の統一と各州、各民族の統制に成功し來つた所謂アメリカニズム時代であつた。

併し、一度一九二九年の大恐慌勃發するや、そのアメリカニズムの下向線的顚落と共に、失業者の氾濫、銀行の大休業、戰傷モラトリアムに續く共產主義陣營の發展を通して、共の內包せる經濟的・民族的諸矛盾は再び表面化するに至つた。嘗て南北戰爭に至るまでの慘虐なる黑人奴隸制は今や千五百萬の黑人プロレタリアとして、謂はゞ民族的南北戰爭へ轉化し、白人プロレタリア戰線に併行する。他方に於ては、ヨーロッパの獨伊戰線に伴ふ變遷は直ちに嘗てのヨーロッパ諸民族の夫々の植民地的地盤として生長せるアメリカ各州に反映され、その利害關係の無統制はアメリカ其のものゝ內的矛盾を暴露するに至つた。

今日のルーズヴェルトのニラ運動、ドル貨切下げ等の諸問題を續る經濟的社會的危機を一時糊塗せるアメリカは、背後より迫る獨伊戰線におびえつゝ、内面的に爆發せる民族問題を拾集すべき發展的展望なく、表面に毅立せる日本世界戰線の前に徒に戰慄するのみである。僅か數世紀にして奴隷制より金融獨裁制にまで展開せるアメリカは、その自己の發展史を世界史に適用して、自己中心の世界進化論を作り上げるや、直ちに新なる世界史的怒濤の中に死臭を吐く。憐むべきアメリカニズムの沒落！

三、第二期世界變革戰爭

今や、アメリカは自己の發展史の逆流の前に佇んだ。反獨伊戰線に參戰せんとするも、一方に於ては、その私有財産は概ね女性の掌中にあり、勝利の展望なきアメリカ參戰に對する

全女性の反戰的輿論に蔽はれ、他方に於てはその生產と軍隊における黑人並にプロレタリアートの反戰運動に壓迫され、しかもその中產階級は概ね伊獨系民族に占められてゐるのみならず、ユダヤ財閥を統制する能はず、自己の內面的矛盾をすら克服し得ざる悲運に陷つた。外にあつては、カナダ、中・南米のカトリイク地盤に對するムソリーニ政策の進展に伴ふ莫大なアメリカ投資の不安は、南米における人民戰線に對するヒトラー政策に追ひつめられゆく不安と相俟つて、アメリカは、もはや極度の恐怖病に陷りつゝ、自己の產業の中心をなす支那湖南省のタングステン問題をはじめ、南洋問題、日本のアジア・太平洋市場並に資源よりの締め出しに、極度の症狀惡化を呈し始めた。

大西洋は、既に獨伊の歐・阿戰線の擴大と共に、その潛水艦、飛行機戰略の下に壓迫され、大西洋を媒介とする英米協同戰線の切斷を如何ともなし得ず、唯アメリカにとつて殘されたた歐米媒介通路は太平洋のみとなつた。嘗つてアジア・アメリカを連結せるアリューシャ

ン・アラスカ通路と黒潮文化圏ルートのみが、今やアメリカとイギリスとを連絡する唯一のルートと化した。アメリカの念願する唯一の夢は、從つて日本の中立以外の何者でもなくなつた。

嘗てアラスカをロシアより買收したアメリカは、その軍備擴張をアリューシャンに延ばし、蘇米協同戰線を企圖し、南方にあつてはグァム島、オセアニア、フィリッピンを濠洲より南阿、シンガポールのイギリス海上權に結びつけ、印度を通ずるヨーロッパ・ルートを確保せんとする。日本の中立のみ、英米協同作戰を可能ならしめる今日、アメリカは巧みに言を弄して、或は日本に對する經濟封鎖を、自己が東洋より經濟封鎖さるゝ恐怖を押し匿しつつ威嚇し、或は日本の英米崇敬的番犬に對してクレヂット設定を申し入れつゝ、日本中立の保證を買收せんとする。

併し、我が肇國の大理想を實現せんとする搖ぎなき世界戰線――現實の政府の如何を問は

ず、我が日本史の國民的態度の前に、アメリカはもはや太平洋における英・佛・ソ・米協同作戰の積極化を拋棄せざるを得ず、徒に歐米の矛盾的宿命を想ひつゝ、大西洋を凝視するのみである。

日獨伊軍事同盟の結成は、英米連絡路たる太平洋の拋棄を必然化するのみならず、大西洋ルートの連絡不可能の故に、唯アメリカは中立の餘儀なきを自覺せしむるのみである。獨伊戰線に伴ふヨーロッパの自己矛盾はその儘アメリカの自己矛盾であり、第二次歐洲大戰がそのまゝ日本世界戰爭に結合されるに至つた今日に於ては、もはやアメリカのヨーロッパ的自己矛盾は日本の世界革命の前に壞滅するの外はない。中立せんとするも、崩壞の外なきアメリカが、今や唯現狀維持の平和獨占のみを哀願するルーズヴェルトの背後に、ユダヤ人ルーズヴェルト夫人の顏を悲痛に見守る醜狀は、何を意味してゐるのか。

ユダヤ問題と共に、アメリカ・インディアンとして虐殺されたツラン民族たるアジア人の

アメリカ問題は、黒人問題と日本第二世問題をも同時に解決すべき日本イデオロギイを待望してゐるのである。かくて、日獨伊軍事同盟は必然的に、南北全アメリカに亙る民族問題に對する協同作戰を最初に取り上ぐべきであり、日本アジア・太平洋圏に包含さるべき印度、西南アジア、東部アフリカ、オセアニア、南洋、西部アメリカの廣汎なる領域における民族問題をひつさげ、歐米植民地の全解放にむかつて全力を集中し、以つて歐米の資本主義國家の沒落を通して獨伊を徹底的に掩護すべきである。植民地民族の解放と統一のみ、第二期世界變革戰爭を決定するものであり、此の方向に於いて日獨伊軍事同盟は徹底的發展を企圖すべきである。

アメリカ問題は、從つて日本のウラル・アルタイ圏と黑潮圏との復古統一として取り上げられ、日獨伊世界戰爭の中に、印度問題と並んで最初に決定されねばならぬ。

アジア民族の鏖殺と奴隷制の上に成長せるアメリカ帝國主義の非人道性は、此の第二期世

界變革戰爭の最大の敵でなければならぬ。憐むべきアメリカ追隨主義は、今や植民地的番犬の蛆的分泌物に過ぎぬ。世界最强の日本海軍は、あまりに厖大なる太平洋上において、あまりに穢悪・倭小なる蛆が眼に止まらないだけである。併し、蛆は夥しい黴苗を貯へてゐることを銘記せよ。

一九三九年の夏、かゝる英米的蛆によつて、正に決定されんとした日獨伊軍事同盟は、悲慘にもむしばまれ、此處に上述し來つた決定的な方向は一時混亂の狀態に陷つたのであつた。かゝる決定的な方向の喪失は、遂にナチス・ドイツをして背後の敵、ソ聯と妥協せしめ、遂に第二次歐洲大戰の表面化の時期を早めしめるに至つた。日獨伊軍事同盟によつて、英米ソを挾殺しつゝ、新なる世界秩序建設の闘爭過程に入るべき必然性は、かくて日獨伊の相互孤立化のまゝ、一方に於ては第二次歐洲戰線の擴大化、地中海及びアフリカ戰線の延長と並んで、他方では太平洋を舞臺とする日對英米の尖銳なる闘爭過程を惹起したのである。

V　世界史とナチス

一、世界史の辯證法

世界史上、古代の文化、——ヨーロッパに於いてはギリシヤとかローマとかいふものであるが、このギリシヤやローマの國家形成をやつて行く時には、その前段階にあつた所の諸々のエジプトとか或はバビロニヤの系統とか、或はカルタゴの系統、さういふ民族國家を徹底的に否定して、自分の新しい國家形態の基礎を置き、ローマに於ては「帝國」の形を造つたのであるが、その古代が上代を否定した時には、その上代のもう一つの前段階にあつた所の統一的「廣地域國家」を自己の模範として取上げた。

勿論この事はギリシヤに於ては失敗に歸し、ギリシヤ自身は飽くまで都市國家の形態に留

つたのであるが、その次に現はれた所のマケドニアは、正しくさういふエジプトとかフェネキヤの繼承形態を否定して、その前段階の形態たる大いなる帝國を形成せんとした。その帝國は何であるかと言へば、自己自身が自給自足圏を確立すると同時にその帝國自身に於て諸々の民族が統一され得るやうな國家の形態を持たうとしたのである。このマケドニアの歴史は、實にアリストテレスの世界觀によつて導かれた。かくて、あらゆる民族が其處に於て統一され得るやうなコスモポリス――宇宙都市或は世界都市と云つた方がもつと明瞭と思はれるが、――さういふ都市の形成を行つたのである。

そして又ローマの共和國やその後に續くローマ帝國とは、さういふ世界都市を更に統一するやうなローマ帝國を作つた。斯ういふ古代の諸民族の統一的國家ともいふべき「宗教國家」を作る時には、前段階の上代の「民族國家」を否定して、もう一つ前にあつた諸民族の統一的な廣地域國家の組織を考察し實現したのである。

又中世がかゝる古代を否定する時に、中世の國家形態はどういふものをモデルにしたかと云へば、さういふ廣域の宗教國家を否定して、即ち古代的な帝國の形を否定して、上代の王を中心として民族を組織して行つたエジプト的な性格、或はバビロン的な或はユダヤ王國的な性質構造、さういふ風なものを最高のモデルとして取上げたのである。もつと具體的に云ふならば、中世の法王廳の組織は、諸々の教會を拵へ、その教會を法王朝が締め括る。かくてその教會を中心にした一地域を法王廳の教權の下に精神的な統一を圖る、その事に依つて色々な土地に定着して居る民族の統制並に支配權を握つたのである。さういふ風な中世の「教權國家」の形態、法王廳的なヨーロッパは、共の前の古代を否定したのであるが、かく古代を否定する時に、その古代のもう一つ前段階の上代の組織を參考に採入れたのである。

それから斯の如き中世より近世への過渡期をなしてゐる「封建國家」をぶち壞して一定の土地に定着してゐる所の民族を中心にして所謂近代國家を作つて行つた、その中世的封建制

を否定して行く時には、中世を逸に先驅して居た所の、上代より古代への過渡期を形成してゐたギリシア的な或はフェネキア的な「都市國家」の形を模範にしたのである。かゝる初期古代の形とは何であるかと言へば、一定の民族がその民族だけで都市的國家を作り、一定の貨幣制度をもつて統一してゐた。さういふ風に一定の民族が一定の小地域に定着して近代國家を作らんとした時には、中世的な封建領主は商業都市に壓倒されながら、次第に法王廳から獨立して行つて近代國家の基礎と方向とを作つて行つたわけである。さういふ風に近世の國家といふものは、中世を否定する時にはもう一つ前段階の古代的な都市國家をモデルに取つたといふ現象が、歴史のタイプとして重要な問題になつて來るのである。

然らば近世史を今將に否定せんとして居る世界史の眞直中に於て、何を範例に取つて居るかと言へば、ナチスの如きは、中世に於ける法王廳の國家の形成とその仕方をモデルに取つてゐるのである。つまり、法王廳の精神的な一つの中心があつて、色々な土地に定着した民

族の諸々の特長を生かしながら精神的にはそれを法王廳が統一して行く、さういふ國家の形態を取らうとして居る。それが今度のナチス獨逸がやらうとして居る目的である。即ち、フランスとかイギリス、ノールウェイ、ルーマニアの如き一定の土地に結付いた國家、而もそれぞれ一定の特殊性を持つてゐる國家をNational Socialismus（民族的社會主義）なるイデオロギーに於て統一し、恰も教會の如くナチス黨が支配しつゝ、各土地の持殊性を生かし、其處に新ヨーロッパ國家を形成しようとして居る。これは恰も中世の時に法王廳がなしたと形式的には同じやうな類型に屬するものである。

其處に將來のヨーロッパが生れて來る方向があつて、第二次ヨーロッパ大戰は、今までのさういふ近代的な國家を決定的に否定する、さうして新しくそれぞれの特殊性を生かすやうな自己の自給圏、自己の歴史的な再編成を行つて、其處に小さな近代的なシュタート（金權獨裁的國家）でなくして新民族國家（ライヒ）としての廣地域なヨーロッパ國家を作る。そ

の精神的な中心にナチョナール・ゾチアリスムスを持つて來る、その時の主體性はどういふことになるかと言ふと、その主體性こそが曾て中世の末期に實現した所のオットー大公に依つて基礎付けられた「神聖ローマ帝國」をモデルに取らうとして居るのである。

神聖ローマ帝國がローマ法王廳に對抗して封建領主を糾合しつゝ法王廳の權力と戰つた。それがつまり近代に至つて封建領主と商業都市とが結合して一定の土地に結びついた近代國家が起る魁をなした。神聖ローマ帝國はかゝる過渡的なものではあつたが、ゲルマン民族が主體となつて作つた最大の「ヨーロッパ國家」であつた。今日ナチス獨逸は將來出來るであらう所の斯の如きヨーロッパ國家といふものゝ媒介的な位置を占めようとして居るわけである。丁度自分達の祖先が中世の時に行つた所の神聖ローマ帝國と同じやうな歷史的な使命を、今日のナチス獨逸が果さうとして居るのである。隨つて、ゲルマン獨逸は、新ヨーロッパ國家形成に於て、ナチス黨をして媒介的な位置を占めしめると同時に、自分がその主體的な役

割を果さうとして居るのである。

所がファッシズム伊太利、或はフランコのファランヘ西班牙、或は將來出來るであらうフランスのナチョナール・ゾチアリスムス、佛蘭西ナチス或は英吉利ナチス、さういふ風なもの丶中で、現在の形では、フランコとかムソリーニとかヒトラー、この三者の三頭政治、或はナチス佛蘭西といふやうなもの丶代表者が加はるかして、今までの近代的資本主義的シユタートを破壞しつ丶、新なる意味のナチョナール・ゾチアリスムスとしてのヨーロッパ國家、その支配的な政治的な構成として三頭政治或は四頭政治といふやうな形が現はれようとして居る。

ところで、今までの金融資本主義としてのオランダとかイギリスとかベルギー、さういふ風なものはアメリカ並にカナダに移動を完了してしまつて居るわけであつて、これ等のアメリカはどうなるか。カナダとアメリカ合衆國と南米、それから今までイギリス帝國が持つて

居つたインドとかオーストラリヤとか南阿聯邦、斯ういふドミニオン、自治領がある。それから又自己の支配下に置いて居た多くの植民地と保護國、かゝる近代イギリス的なるものが、上述せる如きシュタートの崩潰過程に於て、如何な形態をとるであらうか。

此の二個の重大な問題に答へることこそ、現代の世界史を明かにし得る所以であらう。イギリスが、かゝる崩潰過程に於てドミニオンとか植民地とか保護國とかいふものを自己の體制に再び吸收し得るやうな態勢を執る爲には、先づ近代のイギリスの組織を作つて居る所の、キングとパリアメント（議會）――資本主義の宣傳機關――といふものが一緒になつて統治して居た所の、さういふ王政が否定されねばならぬ。かくてのみ、北米合衆國とカナダとの合作形態が可能となるであらう。つまり、カナダは歷史上簡單に言へば王統派とユダヤとの合同戰線に於て基礎付けられて行つた、このカナダの非常に勢力を持つて居る王統派をぶち破らなければ、デモクラテイックとしてのアメリカ合衆國と合體することは不可能である。

隨つてカナダとアメリカを統一して新しくアメリカ帝國或はアングロ・アメリカン・ユーナイテッド・ステートともいふべきものを作つて行く爲には、カナダの王統派の基礎である所のイギリス本土の王政を否定しなければならないのである。隨つてこの第二次ヨーロッパ大戰の過程に於て、恐らくイギリスのキングといふ制度が否定されるであらう。その事に依つてカナダの王統派は沒落してデモクラテイックなアメリカと統一し得るやうな形に、カナダが變形して行くであらうといふことは豫想し得るのである。もう一つは印度洋を中心とする印度、濠洲、南阿聯邦、東阿植民地等の新自給自足圈國家、卽ち「新イギリス印度洋國家」ともいふべきものを、チャーチルは意圖しつゝあるかに見える。

さういふチャーチル戰略の實現には、イギリスの諸々のドミニオンや植民地が新しい意味に於て統一されるやうなアメリカとか印度とかいふ組織を執らなければならぬ。併しながら之を達成する爲には、カナダとアメリカ合衆國の統一のみではなくして、今までのスペイン

の植民地であるとか或はフランスの植民地であるとか或はイギリスの植民地に依つて構成して居た所の南アメリカ自體が非常な大きな變動期に將來入つて來る可能性があるので、ナチス獨逸は既にフランコとムソリーニと共に、南米獨立戰線の運動を今日まで徹底的に行つて來たのである。それと同時に、日獨伊の提携によつて、太平洋と印度洋とにおける日本の積極的な發展を、ヒトラーは念願してきたのである。隨つて先年のスペイン戰爭といふものは南米に於けるスペインの植民地をナチス的な或はファシズム的な南米國家に形成しようといふ意圖の下に、ムソリーニ並にヒトラーがその本國であるスペインの革命戰を斷行したのである。かくしてナチス獨逸やファシズム伊太利の南米の工作は今日既に大きな實りを上げてゐるわけである。曾てパン・アメリカ同盟を拵へようとしたルーズベルトの運動に對しても、アルゼンチンは反對の態勢を執り、或は又ブラジル大統領がルーズベルトの南米共同戰線の申込に對して、敢然として吾々は舊組織の爲に戰ふのではなくして、新に發展し新に生

れるであらう所の新體制、新秩序の爲にこそ戰ふのである。隨つてアメリカ合衆國との協同戰線を拒否しなければならないと答へたやうな基礎が何處にあるかと言ふならば、南アメリカ自體にそれ程ファシズム、ナチスの運動が既に多くの賓りを擧げつゝあるといふことを物語つてゐるのである。

然るにアメリカ合衆國とカナダとの統一戰線並に新しいアメリカ帝國が出來る時には、どうしても南米を自己の中に入れなければ自給自足圈は出來ないのである。而もアメリカが南米と北米とカナダとを合體するやうな組織を執らなければならない。そのモメントを何處に摑むかと言へば、今度の第二次ヨーロッパ大戰に參戰するといふこと以外には、さういふ契機を摑むことが出來ないのである。隨つてルーズベルトは恐らく太平洋牽制と同時に驀らにアメリカ自身の參戰への態勢を執つて行くであらう。さうして參戰を機會にしてナチス獨逸、ファシズム伊太利が工作しつゝある南アメリカが既にナチスやファシズムの地盤であるとい

ふ名の下に、南アメリカに挑戰するであらう。隨つて第二次ヨーロッパ大戰へのアメリカの參戰こそは、南アメリカと北アメリカとカナダとが統一的な形を作る、さういふ鬪爭に轉化するであらうといふ風に豫想されるのである。

かゝる新アメリカのライヒ或は新ヨーロッパ・ライヒ、さういふものが出來て來る過程に於て、ソヴィエトがどうなるであらうか、又日本の北方通路の問題がどうなつて行くであらうかといふ問題については、多くの人々が疑問を持つて居ると思ふ。

ヒトラーはこの問題をどういふ風に考へて居るかといふに、恐らくスラブ圏といふものは一定の大きな地域と諸々の民族を既にソヴィエト・ユニオンとして統一してゐる。ナチス獨逸や將來起るであらう所のアメリカ帝國といふものとは非常に違つた諸々の民族が既に並立した立場に於てソヴィエト・ユニオンといふものを作つて居る。而もかゝるソ聯自身は充分な自給自足圈國家を形成してゐるのであるから、將來起るであらう所のヨーロッパ帝國とソ

聯とを全く別個なものとして規定し、ヒトラーは從つてスターリンを、自己の三頭政治や四頭政治の中に入るべきに非ずとなしてゐるであらう。

併し、この第二次ヨーロッパ大戰の過程に於て、現在のシュタートは否定されて新しいヨーロッパ國家が出來てしまへば非常な强大なものになるわけであるから、スターリンとしてはソヴィエト露西亞が軈てはこの新ヨーロッパに依つて徹底的に否定されるであらうことは豫期してゐるであらう。

さういふ意味に於て、スラブ圏としてのソヴィエト露西亞とナチョナール・ゾチアリスムスとしてのヨーロッパ帝國との間に鬪爭が必ず起るといふことは豫言することが出來る樣である。その時に初めてソヴィエト露西亞が敢然としてアジア主義の立場に立つて日本との妥協に專念するであらうといふことが十分豫測出來るのである。その時に日本がそれに對してどういふ態度を執るかといふことは、今から十分練つて置かなければならない段階が既に來

て居るのである。

トロツキストとスターリンとの差違は、曾てトロツキストが民族の地盤としての土地を中心にしてスターリンと闘爭を開始した處に横つてゐる。これは第二次五箇年計畫の問題を通じて行はれたわけで、その時のトロツキストは、金融資本の國際市場の攪亂を通して世界革命への公式主義的立場に立つた。隨つて彼は金融資本主義として最後の發展段階に立つた英佛和米における階級闘爭に中心をおいてゐたのである。所がスターリンは、これ等の金融資本主義の發展過程の必然性にのみ依據せんとする所の歐米派に對し、ソヴィエト・ユニオンを形成して居る所の民族は、概ね中央アジアとシベリヤ、蒙古であり、將來把へなければならない大アジアの諸々の民族問題にこそ世界革命の鍵が秘められてゐることを自覺したのであつた。これ等の眞に生產を約束する所の土地、さうしてそれ等の上に於て一定の民族的な文化を形成しつゝある所のアジアの民族を如何に驅使するかに將來のソヴィエト露西亞の發展

が存するといふ風にスターリンは考へる。さうしてこの事によつて、トロツキストの歐米派に對してスターリンのグループはアジア主義なりと稱せられるに至つたのである。

このアジア主義グループは、恐らくゲルマン的な歐羅巴廣地域國家が出來て、それに依つてソ聯との徹底した對立關係に入る、その前段階にこのアジア主義のイデオロギーを徹底化し、さうしてアジアの諸民族をソヴィエト・ユニオンとして强固に再編成しなければ、ソヴィエト露西亞自身は完全に崩潰するより外仕方がない、さういふ風な羽目に陷らない前に、アジアの諸民族の統一的な主體者としての日本に對して妥協の手を伸べて來るであらうといふ事が考へられるのである。隨つて斯う云つた樣なソヴィエト・ユニオンとしてのアジアの地盤といふもの、それから、ドイツのヨーロッパ新國家、それからアメリカ新國家、さういふ三個の新廣地域國家が出來て來るその過程に於て、今までの近代的資本主義國家（シュタート）が中心になつて來た文化が完全に否定されて他の諸形式を形成するであらうといふこ

とは十分豫測出來るのであつて、さういふ厖大な三つのグループといふものが自分の地盤を構成し、又新しい意味の文化組織を作らんとしつゝある。

而もそれ等の三つのグループにとつて最大の問題となるものは何であるかと言へば、今までの歴史に於て一番手を付けてゐなかつた所の太平洋の問題になつてしまふのである。さういふ意味に於てこの三つのグループは太平洋問題を中心として大きな闘爭を演ずる。これは直接的に太平洋の問題であるのみならず當然ヨーロッパ圈とスラブ圈としてのソヴィエト・ユニオンとの闘爭を必然化し、又スターリンを中心として形成しつゝある所のスラブ圈と新しく起るであらう所のトロツキスト的なるアメリカ・ライヒ――或はアングロ・アメリカン・ユニオン――との對立も亦同時に激化するのである。この大きな變動の過程に於て、その眞直中に日本が存在して居るのであつて、この日本がそれ等の三つの類型に對してどういふ意味を持つか、それに對してどういふ政策を持つか、又自分の理念を實行する爲には自分自

身の新しい太平洋圏をどういふ風に形成しなければならないか、又その必然性がどういふ風にあるのかといふことが、世界政策として又世界史として根本的な問題である。

此處で吾々は、現實的に歴史が生産して來た所の一定のイデオロギー、又一定の政策、例へばマルキシズムの運動或は又ナチスの今日行ひつゝある所の闘爭、その闘爭を通じて新な文化を生まんとして居る、さういふ考へ方、又やり方といふ風なものを一應批判して掛らねばならないのである。何故ならば、さういふ風なものが現にこの數年間の世界史を構成して行く一の大きな要素であるからである。勿論これ等の要素が眞に自分の考へて居る事柄を實行し、その爲の戰爭を果敢に實行しながら新しい組織なり文化の諸形態を作りつゝあるからである。然らばマルキシズムはどういふ風な考で、どういふ風な組織をもつてやつて來たとかいふことを考へなければ、吾々が今日マルキシズムの運動がアメリカであるとか、或は北方のルートに大きな勢力圏を持つて居るソヴィエト露西亞の批判は出來ない。又將來のヨー

ロッパを批判する時には、當然今日闘爭しながら作りつゝあるナチスの考へ方、實行の仕方、組織化を批判しなければ、當然將來起る所の對ヨーロッパ政策が立たないのである。

マルキシズムの根本的な態度がどういふ所にあつたかといふならば、一口で言へば、曾て世界歴史の根源に於て原始共產社會があつた、その復古運動が今日の世界革命である、さういふヒポテーゼ、假說を持つて來た處に存する。凡ゆる民族が自分の大きな而も新しい國家或は新しい文化の形を生み出して行く時には、必ず自分の世界史の基礎付け、自分の世界史の根本的なテーゼといふものを持つのである。而もその根本的なテーゼに依つて初めてそれまでの色々な條件であるとか或は文化の蓄積であるとか、さういふ風なものを自分流に解釋し、自分のものにして行くことが出來るからなのである。而もマルキシズムが將來の世界革命を完成し、自分の考を現實的な形に作り上げる爲には、凡ゆる思想、文化、凡ゆる組織を基礎付けるやうな、さういふ基本的なテーゼを持たなければならなかつたのである。そのテ

ーゼが何であるかと言へば原始共產主義社會のテーゼである。曾つて人類は原始共產社會に於て階級のない組織を持つて居つた。それがその後分離し分散して行く過程に於て階級が生れその階級と階級との鬪爭史として今日までの數多くの戰爭と諸社會形態の變遷があつた。この鬪爭は根本的に矛盾の表現として規定され、從つて世界の轉換は否定されるものが徹底的に否定されなければならない矛盾の表現である。かゝる鬪爭を必然化する所の矛盾は何にあるかと言へば、階級社會の經濟的構造にあるのである。從つて今までの世界歷史に於ける階級鬪爭史を現代の資本主義社會の被搾取階級の結束力によつて、完全に止揚し、それを克服して新しい社會形態を作らんとする。卽ち原始共產社會から今日までの幾十世紀の矛盾と抗爭を克服して新に統一する爲には、曾つての原始共產社會のルネッサンスとして將來の世界史が現實されなければならないのである。その爲にどういふ風な世界史の編纂を爲し、又それを形成して行く所の主體はどういふ形に於てどういふ意義を持たなければならないかと

いふことを考へたのである。

又ナチス獨逸に於いては、ヨーロッパ文化、つまりアリアンが作つて行つた所の文化圈は當然統一されなければ現在の歐洲の矛盾と沒落を救ふことが出來ないのであつて、北歐神話圈としてのゲルマン民族の鬪爭によつて、かゝる悲劇的な歐洲を克服し、新なる統一形態を創造せんとしてゐる。この場合、ヒトラーは既述した如く、神聖ローマ帝國をモデルとして把へながら、諸民族の統一者であり、國家創造者である日本の神話的統一構造を仰ぎみてゐるのである。太平洋やアジアの諸民族を統一する必然性と實力を持つて居る日本の國體とその歷史を思慕しつゝヒトラーは自己のヨーロッパ自身の統一を夢み、その果敢なる鬪爭を續けて居るのである。所が殘念なる哉、鎖國以來倭小化された日本人は毫もさういふ風に考へようとしないのである。

ナチスは、斯の如く日本をモデルにしてヨーロッパの諸民族統一國家を構成せんとする。

ヨーロッパの歴史自身に於て云ふならば、法王朝を中心とするヨーロッパの統一圏をナチョナール・ゾチアリスムスのイデオロギーによつて再構成せんとする。その時のテーゼは何であるかといふと、アリアン民族圏が曾つて大きな文化を構成し、そのアリアンの民族文化が東は西南アジアからインドまでも構成したのである。インドへのアリアン民族の移動に依つて曾つてのヴェーザ文化が發展し、その後のインド史が發展規定されたといふ風に考へて居るのである。つまりアリアン民族圏が世界歴史の文化を形成した中心的なものである。之を今新しく統一的に復活することに依つて將來の世界文化の中心的な意味を持つ事が出來る。その主體的な力としてのゲルマン民族に依つてアリアン第一主義の文化理念を實現して行くことが出來るのである。それがヨーロッパに課せられた所の義務である。そのヨーロッパの課題を實行することがナチス獨逸としてのゲルマン圏の確立にあるといふ風に考へられるのである。

そのやうに、あらゆる民族が自分の大きな新しい文化發展の基礎を拵へ、それを形成して行く時に、必ず一定のヒポテーゼを持つて居る。吾々日本は今どういふヒポテーゼを持たなければならないのであるか。私達はそのヒポテーゼとして、スメル文化圈といふものを立てるわけである。ナチス獨逸がアリアンの世界文化のルネッサンスとして、或はマルキシズムが原始共產社會のルネッサンスとして世界史を把握することに對して、吾々は統一社會形態を構成してゐたスメル文化圈の時代を定立せんとするのである。フランスにポール・ヴァレリーといふ詩人があるが、世界史を統一と擴散との二つの時期に分けて批判したり或は鑑賞したりして居るが、今その言葉を藉りて云ふならば、このスメル文化圈の擴散期が始まり、曾ての祭政一致の統一社會は、夫々の土地に分散され、定着して行つたのである。例へば、エジプトのナイルの流域とか或はチグリス、ユウフラテスの流域とか、或はインドのインダス河やガンヂス河の流域とか或は黃河の流域とか、さういふ風な所に擴散して行つたわけで

ある。此處に、初期の土地に定着による民族の概念の發生があつた。これがスメル文化時代につぐ擴散文化時代の第一期である。さう云つた最初の第一期の民族國家は、スメル文化圏の擴散形態として現れ、一定の民族の形が生れた。その時代に武器を生產するとか或は天文の關係に於て種を蒔く、或は又洪水があれば土地の分合整理といふ問題から幾何學的なテクニックを持つやうな時期が生れる、といふ風にして、生產における一定の專門家族の形が出來て來たのである。

かくして、初期の民族國家の擡頭と崩壞に繼いで、宗教國家時代が出現し、その後教權國家、封建國家、近代國家時代を經て、現在の民主主義國家の時代に至り、遂に厖大な世界變革戰爭の世界史的段階に入つた。此處に於て、吾々は日本史を、かゝる擴散文化の六個の段階を經つゝ、最初の根本的テーゼとなるべきスメル文化圏のルネッサンスを敢行すべき必然的な主體者として、把握するのである。

二、世界史とスメル文化圏

スメル文化圏は、今日までのヨーロッパの考古學とか歴史學の上に於ては、今のペルシャ灣地方に存在してゐたと設定して居る。それがエジプトとかアッシリヤ、バビロンの系統に轉形したり或はアリアンの作つたと言はれるヴェーザ文化にも繼承されて行つた。併し、歴史上の材料は非常に少いものである。例へば今まで能く例に擧げられる材料から云ふならば、ロンドンの博物館にある青い色で塗られた城壁に飾つてあつた獅子の像がある。それがスメール文化の最後の段階であつたスーサ都市の遺物であつて、今までの世界文化史の中では一番古いものである。西歴前三十數世紀のものであらうと想定されて居る。併し私達が今、日本のスメル文化圏として、根本的なテーゼに置かんとするものは、さういふペルシャ沿岸に

あつたと言はれて居るスメル文化と並立して、北方の文化圏、即ちツングース族の支配して居つた天山南北路から蒙古を經て北米合衆國に亙る所の大きな北方の通路、それから南支那からイラン、インド、ビルマ、タイ、ジャバ、スマトラ、斯らいふ南方の世界歴史の通路、もう一つは黑潮の文化圏卽ちマヤ文化やインカ帝國を產んだ太平洋の太陽神話の文化ルート、この三つの交流點を中心としてゐたスメル文化圏を想定するのである。つまり世界歴史の一番大きな通路として、又文化圏として考へられて居る所の北方と南方と黑潮のこの三つの接合點として、黃河、渤海を樞軸とする日本の肇國文化形態ともいふものが見られるのである。

その當時の斯かるスメル文化の形態は何であつたかと言へば、太陽神話を中心とする祭政一致の社會形態を形成してゐたわけである。これが一切の諸文化の根源的な類型として存在してゐた。それが、その後皇紀前三十三世紀頃より擴散文化時代に入つて、スメル文化圏の

分散に從つて諸々の民族國家の形成と鬪爭の時期が始まる。さうしてその一定の土地に制約された民族を統一するやうな上代における王の存在が成立して來たのである。例へば、エジプトの第一王朝、日本の紀元で言へば紀元前三十三世紀に成立したエジプトの第一王朝、或はその後三世紀程遲れて出て來たピラミッド王朝、或は又チグリス、ユウフラテスにおける古代バビロニヤの王朝、或は上代インド文化の中心を形成したガンジス河のモヘンジョ・ダロの王國が出て來たわけである。このチグリス、ユウフラテス河の西南アジアのメソポタミヤ文化圈とそれからエジプトの文化圈、それがお互に交流して居つた地帶がユダヤの根源地であつた。其處にイスラエル文化の誕生がある。ユダヤが迫害を受けたといふことは、かゝる重大なる文化交流點を占めてゐたからである。他方東洋に於ては、日本を中心として上述せる如き三つの文化圈の接合點に依つて形成されて居た所の文化圈が西南アジアと併立して、最もその當時の主體的な役割を果してゐたのである。

随つて、西方にあつては、ユダヤの占めて居た交流點を誰が握り占めるかといふことに依つて、アフリカ、地中海或は西南アジアの文化圈の變遷が決定されて行つたのである。このユダヤはメソポタミヤとエジプトと地中海の文化形成にとつて非常に大きな役割を遂げた。例へば地中海に於ける諸々の民族移動が定着して一定の固定的な都市國家的な形が段々出來てきた頃には、そのイスラエルの地中海への發展ルートを繼承したのがフェネキヤの文化であつた。この世界貿易の起源を成して居たフェネキヤの文化圈の一つに、後にギリシヤが繼承した多島海文化、或はローマの基礎であつたと言はれるエトラスカン文化、さういふ風なものが生れて行つたのである。このフェネキヤが作つて居た地中海文化圈と、それからエジプトとメソポタミヤの交錯點を中心として居た所のイスラエルのユダヤ文化圈に、後にギリシヤ民族の侵入が始まつたのである。それがホーマーが描いたトロヤの戰爭なのである。

十九紀の末期より、持に第一次歐洲戰爭以來、文化と言ふと何か平和にのみ屬するもので

あつて、戦争とは反對のものであるといふ風に考へられてゐる。ところが、事實は全くその逆である。歐洲の古代で云へば、ギリシヤではホーマーの「トロヤ戰記」、ローマではシーザーの「ガリア戰記」が文學史上最も高い位置を占めてゐる。或はギリシヤ哲學をみると、ソクラテスの時代はペルシヤとギリシヤとの大戰爭期である。その戰爭に備へる爲に人々に說いて廻る、さうして新なるギリシヤ文化を基礎付け建設しなければならないといふ運動をソクラテスがやつたのであるが、そのソクラテスの哲學と云ひ、或は又そのペルシヤ・ギリシヤ戰爭以後、沒落過程に入つたギリシヤの諸々の都市が擴散し崩潰して行く過程に初めてギリシヤ文化の遺産を擔つて新しい統一力を求めつゝ地中海を遍歷したプラトン哲學と云ひいやしくも最も哲學的であると云ひ得るものは、最も鬪爭的であり、從つて最も目的追求的であり、最も意慾に溢れたものである。例へば日本史に於ても、「古事記」とか「日本書紀」が編纂された時代は、支那や印度の沒落期であり、一般的には東洋の混亂の時代であつたと

共に、日本自體に於ても大きな闘爭變革の時代であつたのである。さういふ時にこそ初めて日本歷史の編纂が行はれ、其處に日本の古典的な文化が生み出されたにも拘らず、文化と言へば何か闘爭と反對物である平和にのみ屬するものゝやうに言はれてゐる。併し、平和に屬する文化生產が曾つてあつたであらうか。闘爭、從つて目的を忘却した處に、文化が生れたであらうか。

偉大なる文學上の傑作とか、又新しい世界の方向を決定し體系付ける哲學、又その新なる方向と組織を修理する法律、そのやうなものが最も變革的な時代に生れ、、その變革を通して新なる文化を作ることに依つて、それまでの進步を阻んでゐた所の諸々の文化の蓄積を新しく生かして行くので、かゝる闘爭を離れては文化は存在しなかつた。さて、上述のホーマーの時代は、正にそのやうな闘爭的な、從つて文化形成的な革命期であつた。ギリシヤ民族が、イスラエルとか或はフェネキヤの文化圈に對してどういふ闘爭を開始して居るか、侵入

して來たギリシア民族がそれ等の文化圏を如何に繼承して行くかといふ所に、このトロヤ戰爭があつて、その小アジアにおける文化圏との鬪爭過程に依つて初めて燦然としたギリシア文化が始まつたのである。

その後このギリシヤ文化の勃興は、ペルシア・ギリシア戰爭を經て、アレキサンダー大王に依つて廣地域に亙つて擴散され、ギリシア都市によつて繼承され統一された文化は、諸々の民族へ擴散され擴まつて行つた。その運動の過程に於てローマ共和國並に帝國が生れて來た。此のトロヤ戰爭よりローマ共和國の發生に至る六世紀間のアジア民族とヨーロッパ民族の大鬪爭期は、東洋に於ても黄河並に渤海から黄海を中心とする日本の上代文化圏の混亂期であつた。この當時の上代日本文化圏といふのは、スメル文化圏の直接的な繼承者として、既に述べた三つの世界史的通路の接點として、それの文化交流の中心地を占めてゐたのである。この日本の上代文化は、當時太平洋における太陽神話の南洋諸民族の黑潮文化圏との接

觸と同時に、その黑潮文化圈と密接な關係を持つて居たインドの上代文化圈との交流關係が頻々として行はれて行つたのである。

然るに、メソポタミヤ並に印度或はエジプトにおける上代の諸民族王國の交替と崩潰過程におけるユダヤ民族とギリシア民族の移動と侵入の時期が續き、トロヤ戰爭より新興ペルシア帝國による新バビロニアのユダヤ解放に至る二世紀間こそは、實に上代における諸民族の大移動期を現出したのであつた。その頃、イスラエルの系統は四方へ移動して、今のエチオピアにさへ移住して行くのであるが、エチオピアとイスラエルとの共同作戰によつて、エジプトは挾み擊ちにされながら、かの隆昌なりし第一王朝ピラミッド王朝を繼承せるエジプト末期王朝は次第に沒落して、遂に最も古くから發達して居た南方の世界史のルートを通じて、エジプト民族は東洋へ移動を始めたのである。このエジプト人の東方への逃亡によつて上代の日本文化圈は大きな民族移動に襲はれ、最も混亂した狀態に陷つて行つたのである。

この上代の混亂と破壞を導いた西南アジア諸民族並にエジプト民族の大移動によつて、日本の黄河文化圏は、次第にエジプト民族の占領するところとなつた。漢民族といふものは初めから黄河の流域にあつたものではなくして、その時期に斯の如く移動して來て黄河の厖大なる地域に定着することによつて、漢といふ名が出て來たのである。この民族移動の破壞と混亂のさ中が恰も黄河・渤海を中心として居た所の日本の混亂期を形成したのであつて、後それが支那文獻における春秋戰國の時代と云はれるに至つた。

その當時が又同時に、インドに於ては先程述べたヴェーダ文化圏を作つたアリアン民族のインド侵入期である。先住インド人、即ちドラヴィディアン民族が作つてゐたモヘンジョ・ダロ王國の如き古代から發達して居た所の上代文化圏の繼承として侵入民族アリアンのヴェーダ文化が大きな地位を占め、遂に婆羅門階級の獨裁制度が其處に確立されて行つたのである。このやうにして、日本のスメル文化圏がかゝる民族移動に依つて一應分離され擴散され、

非常な大きな攪亂の時代に襲はれて來た時に、初めて日本の再確立としての神武天皇の御建國が爲されたのである。日本の建國は、このやうな上代のスメル文化圈が擴散され、さうして王が中心になつてゐた上代民族國家の闘爭、移動期としての崩潰過程に從つて、曾てのスメル文化圈を統一して再び新なる世界を作らなければならない、さういふ必然性に立つた時に初めて行はれ、所謂修理固成の時代に入つたのである。この民族の混亂と闘爭のさ中に於て、最も人類の典型的な古典として仰がれて居る所のスメル文化の遺産並に其處に包含されてゐた諸民族を如何に再統一し、將來それを立派な統一的國家として形成しなければならないか、その基礎付けこそが我が建國であつたのである。

そのやうに建國を解釋することに依つて、その後の日本史の發展は、正に世界混亂期のさ中に立つて、その文化遺産を新なものに形成し、擴散し、淪落して行く所の民族と其處に孕まれた諸家族を如何に統一するかといふ任務を持ち、從つて初めから絶間ない苦惱の歴史で

あつたのである。謂はゞ、建國から今日までの日本史は、この世界の諸民族竝に諸々の民族文化を新しく編纂し、それを統一する爲の苦惱と訓練の歷史であつたといふ風に規定しなければならないのである。このやうにして、日本の建國の時代は擴散期の末期に於て爲されると同時に、日本がさういふ上代の諸民族國家に先んずる祭政一致のスメル文化圈の直接的な繼承者として立上り、さうして將來の國家形態を規定し、方向付けるやうな建國の基礎を置いたのである。隨つて、その後に現はれる所のペルシヤ帝國とか或は漢民族の王道による南北支那の統一運動だとか或はインドの佛國土建設とか、さういふ風なものが總て宗教國家の形をとつて、色々な民族とそれら各民族のイデオロギーとか信仰を統一するやうな、さういふ宗教的な廣地域國家が、日本の皇道による新國家建設に範をとりつゝ、出現するに至つた。かくて日本の建國の後に現はれて來た所の世界史に於ける國家の諸類型は、正しく宗教國家時代として規定されなければならない。

斯の如き　神武天皇の皇道國家建設以降、即ち宗教國家時代より世界史は敎權國家の時代を經て、封建國家、近代國家、民主主義國家の時代となり、遂に世界史上最大の變革期たる現代の大混亂期が現出するに至つた。今、これらの世界史の發展を詳論することは他の機會に讓るが、現代の世界史的變革は、英米を中心する民主主義國家の崩潰に隨つて、正に擴散文化時代における民族國家、宗敎國家、敎權國家等の六段階が根柢より轉換し、全く新なる國家形態の出現が要求され、かくて再び統一的なスメル文化圈の復活が必然化しつゝあることを物語つてゐるのである。

三、世界變革と日・獨・伊

以上述べ來つた如き世界革命としてのスメル文化圈の復活運動は、既に滿洲事變以後その

方向を明かにするに至つた。歐洲においては、ナチスの神聖ローマ帝國復活とファシズムのローマ帝國圈復活とによつて、正に新ヨーロッパ・アフリカ廣地域國家の出現期となり、世界史北方通路においては、スターリンのスラヴ及びアジア諸民族の統一的廣地域聯邦の發展期が劃されつゝある。

しかも、世界史南方通路にあつては、イギリスは今日までの植民地英帝國を拋棄して、印度洋を中心とする印度、ビルマ、マレー、ボルネオ、ニューギニア、濠洲、並に南阿、タンガニカ、ケニアの東アフリカ、そしてアラビア、イラク、イラン、アフガニスタンの厖大な廣地域國家を形成せんことを密に計畫しつゝある。アメリカをみれば、カナダと北米合衆國との合同としての、謂はゞアングロ・アメリカン統一廣地域國家を作らんとしてゐる。

かゝる廣地域國家出現期において、今日までの世界史が此のアジア・太平洋圈即ちスメル文化圈を貫く世界史南方通路を把握するか否かによつて決定されてきた必然的な歴史的・地

理的構造に少しく注意するならば、日獨伊の果すべき任務も亦自ら明かであらう。從つて、獨伊は今や全力を擧げて、バルカン並に東北アフリカの世界史的ルートを東方へ驀進しつゝ、日本の此の南方通路への進出と連結せんとしてゐる。

このことによつて、今日までの歐米の民主主義的資本主義國家の成長を約束し來つた西南アジア、印度、支那、南洋、アフリカの所謂アジア太平洋圏は、かゝる英米的資本主義の搾取より完全に解放さるべき輝しき變革の時代を見ることが出來るのである。この世界史の方向に關する日本の自覺と實踐こそ、諸民族を解放し、救出し、統一し、其處に甫めて再びスメル文化圏のルネッサンスが出來し得るのである。又このことによつてのみ、正に日本の歴史的實踐が同時に世界變革の實踐であることを自覺すべきである。

もし、かゝる方向と實踐を見失ふならば、英米は逆に、上述せる如き二大廣地域國家を我がアジア・太平洋圏に形成し、日本はその隷屬化におかれ、東洋諸民族は再び英米の奴隷と

化するであらう。このやうな變革の最中において、詔勅の渙發を仰ぎみる。恰も、上代における世界變革期に際して下し給うた　神武天皇の建國の御詔勅と共に、今度の昭和世界維新の御詔勅こそは、洵に世界諸民族に對する日本の歴史的方向と新に形成すべき世界國家の形態とを規定し給うたものであつて、共處に日獨伊は英米に對する果敢なる戰爭を通して、諸民族統一としての新廣地域國家を建設し得るのである。

ナチス獨逸の世界政策

昭和十五年十一月十四日印刷
昭和十五年十一月十七日發行

──（¥0.60）──

著作者　小島威彦

發行者　北原鐵雄
東京市神田區神保町三丁目一三

印刷人　小關求馬
東京市神田區神保町三丁目二七

印刷所　正隆堂
東京市神田區神保町三丁目二七

發行所　アルス
東京市神田區神保町三丁目一三
電話九段二一七五・二一六七
振替東京二四八八八番

・ナチス叢書・